

---

# 短編集

まかろん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編集

### 【コード】

N6331P

### 【作者名】

まかろん

### 【あらすじ】

灰原さんを中心にたまに蘭ちゃんや歩美ちゃんなどもあつたらいな。

闇が消えた夜（前書き）

コナンと哀のお話

## 闇が消えた夜

あれは暑い夏の出来事。

一人の老人の一言でキャンプに行ったときのことだった。

「わあー!!!」

三人の声が一斉に重なり目はキラキラと輝いている。三人の前にあるのは大きな木造の家だった。

「すつごーい!!! 大きなお家があるよ!!!」

「一体これどうしたんですか!？」

「すげー!!!」

三人は興奮しながらこの場所に連れてきた本人、阿笠博士に尋ねる。博士はフフンと鼻を鳴らしながら聞いてくる三人、歩美と光彦と元太を順番に見て笑顔になる。

「これはの、バンガローと言ってキャンプする人が使える家なんじやよ。この家の中で料理もできるし眠ることもできる。まあしかし布団や調理器具とかはないから各自寝袋や調理器具を持参しなければならぬがな」

「へえーすごいね!!!」

博士の説明でさらに目の輝きが増した三人は早速バンガローの中に入って探検しだす。博士はまるで三人を孫のようにニコニコしながら見守り、そしてその横に並んでいた二人もバンガローに圧倒されるようにジッと見ていた。

「…博士にしてはすごいよな」

ぽつりと呟いた眼鏡の少年、コナンに博士は睨むようにコナンを見る。

それをよそに茶髪の少女、哀は珍しいものを見るようにずっとバンガローを見ていた。

コンクリートで固められた家なら嫌というほど見たことがあるがこんな木造の家に入るのは当たり前、見るのも初めてだった。

しかも周りにはいかにも自然と言ってもいいような風景がある。周りに芝生があり、そして奥には木がたくさん並んでいる。こんなところがこの国にもあったのかと心地よい風に吹かれながら哀は思った。

「どうじゃ哀くん。なかなかの絶景じゃろ？」

今までコナンを睨んでいた博士も哀の傍によりニコニコとしながら伺うとまだこの風景に圧倒されているのかバンガローを見ながらゆっくりと首だけ動かす。

意外な哀の驚きに博士の機嫌の頂点になり先にバンガローの中に入った三人を追いかけるように博士も中に入っていく。

「ほら、俺たちも早く中に入ろうぜ」

コナンは哀にそういうとハツと我に返ったように肩を震わせて慌てるように頷きバンガローに入る。

中に入るか否か哀は目を丸くさせた。部屋中に広がる木の匂い。そして辺り一面の茶色の風景。何だか心が安らぐような感じがした。

「すごい…」

ぽつりと呟いた言葉は誰にも届かず相変わらずの三人はバンガロー内の探検の途中で今は奥にあるテラスにいた。

博士は大きな鞆から色々出し始めコナンはそれを手伝っている。

そんな光景を見て哀は小さく笑う。体が小さくなる前はこんな体験二度と出来ないと思っていたのに神様は本当に悪戯好きだ。そう思いながら哀は博士とコナンの元に行った。

そしてある程度用意が終わるとキャンプの定番であるカレーを作り、皆で奥のテラスで食べた。いつものキャンプなら焚火を囲みながら食べるのだがこうやって周りに自然がある中、設備されているテールで食事をするのは何だか新鮮な気分になった。

そこではみんな他愛ない話をして一緒に笑い楽しい夜ご飯だった。

そして食事が終わった後も十畳もある部屋の真ん中で学校のこと、過去に会った事件のこと、警察署内の恋愛のこと…色々な話をして決して会話は途切れることはなかった。

主に歩美と光彦と元太が話していたが聞いている哀も度々微笑みを見せて話に加わっている。

そんな哀を見てコナンも安心したかのように頬笑みを見せたのを哀は知らない。

しかし時間がもう遅いせいか口数はどんどん少なくなり、もう限界だったのか皆は寝袋に入って寝ることにした。

シンと静まり返った部屋の中、ふとコナンは目が覚めて寝袋から起き上がる。周りにはイビキを書いている元太と博士。そしてすやすやと寝息を立てて眠る歩美と光彦。

こんな五月蠅いイビキの中よく眠れるものだと思いをすると博士の隣の寝袋に目が行った。そこはもぬけの殻でコナンは首を傾げる。確かそこに寝ていたのは

周りを見るが寝ている四人以外人影もなく少し心配になったコナンは物音を立てないように用心して外に繋がるドアを開けた。

外に出てみると深夜だからなのか物音ひとつせず虫の鳴き声や風がなびく音などが聞こえるだけで都会特有のエンジン音が聞こえない。

ああ、本当にここは自然が溢れるところなのかと感動に浸っているがら辺りを見渡すと丁度自分たちがいるバンガローの向こう側に見慣れたウェーブの髪が見える。

「…何やってんだよ」

心配して探していたのに当の本人は下にビニールシートを敷いて寝転がっていた。

コナンはそこに近づいて少し覗むように彼女を見下すと驚いたように「工藤くん…」なんて言って決して起き上がろうともせずそのままお互いに見つめ合う。

「…何してんだ？」

呆れるように彼女、哀に問うと哀は上を指差す。

「星を見ていたの」

指差す先には満点の星空。決して都会では見られないくらいに空は光輝いていた。

「吉田さんと出かけた帰りに空を見たら星が幾つかあって…でも夜になるとこんなに凄いととは思わなかった」  
ポツリとそういう哀の目はまだ星を見ていてコナンもため息を吐いて哀の隣に寝転がり星を指差した。

「知ってるか？あれがベガであれがアルタイル、んであの星がデネブ。それを繋げると夏の大三角ってんだ」

ベガ、アルタイル、デネブを指でなぞる様に動かす手を哀は目で追いかける。確かに大きな大三角が出来て目を大きく開けるとコナンは得意げに笑い次に夏の大三角の下の方に指を動かして丸で囲むように指を滑らす。

「あれがさそり座でその隣がいて座」

「へえ…」

「そんでさそり座の上にあるのがへびつかい座であの夏の大三角の真ん中らへんにあるのがはくちょう座」

「…そんな星座もあるのね」

「ハハツまさかお前が知らなかったとはな、意外だぜ」

「仕方ないじゃない。化学式とかは頭に叩き付けられたけど星に関しては誰も教えてくれなかったのだから」

「本とかで見なかったのか？」

「ええ、星なんて一生見られないと思ったから…本で見ても虚しいだけよ」

それはそうだと納得したように何も言わなかった。組織にいたころはずっと研修室に籠りきりでキャンプなど行ったことがないと哀は言っていた。

そんな哀を救ってくれたのはきつとあの薬なのだろう。コナンにとってあの薬は自分の体を縮まされた怨念のあるものだが哀にとってはきつと外の世界に連れて行ってくれたもの。助け舟みたいなもの



なのだった。

「でも凄いわね…この星が全部宇宙にあると思ったら」

「そうだよな…」

「でも、人が死んだら星になるって本当なのかしら」

「え？」

「私が死んだら…星になれるのかしら？」

哀は星を見ながらそう言った。その言葉はまるでもうすぐ自分の生涯が終わってしまうと言っているような言い方でコナンはあまり気に入らなかつた。

人は死んだら星になる。確かにそのような仮説はどこが元凶が分からないが人々に知られている。

しかしそのような話は悪魔でも仮説にすぎない。人が星になるなんて有り得ないことだ。コナンはそう思ったがあえて口には出さなかつた。

「お前は星になりたいのか？」

「…そんなことはないわ。ただ羨ましいだけ」

「羨ましい？」

コナンは哀見て不思議そうに尋ねると星を見ていた目を閉じる。

「だって私は輝いていないもの」

そう、目を閉じれば辺りが真っ暗になるように自分もまた暗い世界にポツリといるようなもの。でもそんなところが似合っているのかもしれない。明るい世界なんて眩しすぎて死んでしまうだけ。きっと自分には似合わない。

目を閉じながらそう思うと、ふと右手に温かい感触があり目を開け右手を見るとコナンが哀の手を握っていた。

「工藤く…ん？」

「なーに暗くなってるんだよ。前にも言っただろ？俺がお前を守ってるって」

そう言っつてコナンは満点に輝く星を指差す。

「お前が組織とかそんなのに解放されて、俺もお前も元の体に戻ったら…嫌になるくらい連れて行ってやるよ、こんな星を見られる場所にな」

フツと微笑むように星をみるコナンを驚くように哀は見た。

なんでいつもそうやって齒の浮くようなセリフを軽々と言えるのだろう。

気が付くと哀の目から涙が溢れていた。

「本当に…綺麗ね」

そう言っつて涙を流す哀に気づくがコナンは何も言わずに星を見る。

このまま時が止まってしまえばいいのに  
ふとそんなことを思った、夏の思い出。

## 闇が消えた夜（後書き）

灰原さんは星について全くと言っていいほど知らなかったらちよつと可愛いなと思って書きました。実際は凄く知識豊富そうですね（笑）

タイトルは転寝Lamp様（<http://www4.ocn.ne.jp/~madoromi/>）から頂きました。ありがとうございます。ざいます。

さみしさ売買（前書き）

一人ぼっちの怪盗と足の悪い少女（哀）のお話。

## さみしさ売買

道端で怪盗を拾った。

白い白鳥みたいな怪盗はテレビで見る姿とは打って変わってぐしゃぐしゃのまま電信柱にもたれ掛ってぐったりしているのを遠くから見ても分かった。

雨のせいで全身も濡れていて一体全体どうしたというのか。

少女は杖をつきながらも怪盗の傍まで寄り、物珍しそうな目で怪盗を見る。

雨に打たれたせいも、それともそれ以前に気絶するくらいの衝撃を受けたのか、なかなか起きる気配がなくて少女は少し困った。

目の前の人物は怪盗で悪さばかりしているとテレビの前の警察は言っていた。しかし怪盗と言っても元は一人の人間。人間をこのまま放置すると明日くらいには山ほどの警察がここへ来るだろう。怪盗が倒れていること以前に、この怪盗はこのままにしておくとも明日くらいには天国の住人の仲間入りになるのだから。

（いや、たくさん高価な物を盗んでいるのだから地獄かしら）  
顎に手を乗せてくだらないことを考えているうちにこの怪盗の生命力が徐々に削られていく。とにかく自分の傘を怪盗に差し引きずりながらも自分の家へと向かった。

意外にこの怪盗の体重は軽かったため、足の悪い少女一人がかりで何とか家までたどり着いた。

とはいえ怪盗に傘を差しながら普通なら怪盗がいた場所から自宅ま

で一分とかならない道を十分くらいかかったのだから少女の体は雨で濡れてしまったのだが。

(とにかく先にタオルで体を拭いて、ストーブの前に置いておこう) まるで物みたくない扱い方に少女は少しだけ思い悩むが、男性に対して免疫がなくて、急にこのような状況に陥ったのだから仕方がないと言える仕方がない。男性用の服もあまりこの家になければ眠っている怪盗の服も脱がすのも抵抗があった。

なので最善の方法がとにかくストーブの前に置いとけば何とかなること。暖房も効かせて、目の前にはストーブなのだから少女がお風呂から上がっても死んではいないだろう。もしかしたら目を覚ますかもしれない。

そしてその予感は的中し、少女がお風呂から上がると怪盗が混乱しているかのように寒そうな体を抱えて周りをキョロキョロとしていた。

その姿がとても面白くてもう少し観察していたかったがその瞬間、パチリと怪盗と目が合った。

「……ここ君の家？」

目が合つて沈黙が流れたとき、最初に口を開いたのは怪盗の方だった。明らかに警戒心剥き出しの怪盗に折角助けてやったのにと顔を歪めて怪盗を睨む。

「……そうだけど？」

少女はそう言つて台所へと向かった。

家の中ではリハビリ交じりに出来るだけ杖を使わないようにしていた。そのために歩き方がかなりぎこちなくて怪盗が顔を顰めたのが遠くからでも分かる。

しかし怪盗は変な質問はせず黙ったまま少女を見ていた。少女も少々見られているのが嫌だったがそれ以外は気にせず黙々と料理に取り掛かっている。

「先にお風呂でも入って来れば？」

静かな部屋の中、声を上げたのは少女だった。

少女が放った言葉は意外で怪盗は目を丸くした。

「…え？」

「だからお風呂でも入ってきなさいって。このままだと風邪ひくわよ。お風呂ならそのドアを入れてすぐ右だから」

「いや、そうじゃなくて…」

「服なら安心して。少し大きいけど一着くらいならあるから」

「そうでもなくて…俺誰だか知ってる？」

「…怪盗キッドでしょ？」

キョトンした顔をして即答で言われても困る。

平然とした態度で怪盗を見る少女にため息を吐きたくなった。

「ねえ、普通ならさ…不審者、ましてや怪盗を易々と自分の家に入れるのはどうかと思うんだけど…」

控え目に言った言葉だが少女はムツとした表情で怪盗を見た。その顔には『折角助けてあげたのに』と書いていて怪盗は少し肩を震わす。少女は少しだけ目を逸らして一時中断していた料理の作業を再開させた。まるで怪盗の質問を無視するかのよう。

その態度に怪盗もため息を吐きえざるを得なかった。しかしそれ以上には濡れの服のせいで自分の体温を奪われていつているのが分かり、ゆっくりと少女が教えてくれたお風呂場へと足を運ぶこと

にした。

風呂につかると冷たかった体が一気に温まっていくのが分かる。

一体何日ぶりの風呂だろう。確か三日前だったような気がする。それまで怪盗の仕事が忙しくて家になんて帰っていなかったのだから。

(まあ家に帰っても誰もいないけど)

父は自分が幼い頃に亡くなり、母は自分を置いて何処かに行った。だから一人は慣れていた。慣れていたはずなのに…

ふとドアを見ると人影があり、それが少女だとすぐに分かった。きつと着替えを置いてくれているのだろう。

人がいる家はとても久しぶりだった。たまに幼馴染が家に来てくれるがそれはごくたまにだ。彼女だって事情と言うものがあるのだから。

しかしそれだけで怪盗は何だか嬉しい気持ちになった。自分のために着替えを置いてくれた少女に対して感謝の気持ちが溢れていた。

そしてお風呂から上がると案の定大きめの服が綺麗に畳んであり、そして前に着ていた自分の服が見当たらなかった。何となく想像がつく。

バスタオルで頭を拭きながら少し大きめの服に着替えて先程いたりビングに戻る。と暖房器の前に自分の服が干されており、少し苦笑いした。

(一応感謝した方がいいのかな?)

少女は何も言わずに坦々と食事の準備にありついている。臭いで今日のご飯はシチューだと分かった。もしかしたら自分の分も作ってくれているのかと少し期待しているとシチューが並んでいる机の前で少女がこちらをジッと見ているのに気が付いた。



『食べれば?』

そういう顔をしていたような気がしたので恐る恐る少女のいる机の前に座ると目の前に美味しそうなシチューが置かれた。

「…いいの?」

念のため聞いてみたがやはり少女は何も答えない。しかし表情は『いいよ』と言っているように思えたので怪盗はまずは一口、シチューをのみ込んだ。

シチューは全身を一気に温かくしてくれて、怪盗は自然と顔がほころぶ。

それからは無我夢中でシチューを食べた。一人暮らしの怪盗にしてみればこんなに美味しい料理は久しぶりで涙が出そうになった。

「うまい」

「…そう」

返ってきた返事は素っ気なかったがそれよりも「おいしい」と言っ  
て返事が返ってきたのがとてもうれしかった。

少女も机に座り、シチューを食べるかと思いきや、シチューをある人の写真の前に置いて静かに手を合わせた。

「…誰?」

手を合わせている最中にも関わらず、怪盗は少女に問いただした。案の定、少女は怪盗を睨んでまた手を合わせる。きつと黙ってと言っていたのだろう。

しかし、普通に話せるのならちゃんと言葉にしてほしい。怪盗は少し思った。

「私のことを大事にしてくれた人…みたい」

少女は写真の前で手を合わし終えると、怪盗が座っている場所に向かい合うように腰をおろして「いただきます」ともう一度手を合わした。

「…みたい？」

「そう、私には小学四年以前の記憶がないの」

「…記憶喪失？」

「ええ、詳しくは小学一年生以前だけだね」

「…え？」

何を言っているのか分からなくなり、怪盗は聞き返すと少女はシチュエーションを一口飲んでまた口を開いた。

「私を知っている人によると私が事故に遭ったのは小学一年生の時。そして三年間目を覚まさなかった。奇跡的に目が覚めても私の記憶はなくて三年間寝た状態だったために足も思い通りに動かなかった。そして足を動かせるようにリハビリをして今の状態にまで動かせるようになったわ」

「…へえ……」

呆気にとられるように怪盗は二回瞬きをした。

「保護者とかいないの？」

「ええ、私の身内は私が幼い時に亡くなったそうだから。唯一知っている大人の人は隣にいる工藤新一だけ。貴方も知っているでしょう？怪盗なんだから」

「ああ、探偵の……」

「そう。でも安心して、彼は今、愛しい彼女とお仕事でロンドンへ行っているわ」

その目は少し悲しそうに怪盗はまさかと目を見開けた。

「…君、名前は？」

「…灰原哀」

少女の名前に怪盗はやっぱりと目を細めた。何となく似ている思ったがまさか彼女がああ灰原哀だったなんて。

(…生きていたのか)

「ねえ、君はどうして事故に遭ったの？」

「…怪盗のくせに質問が多いわね」

「いいじゃん。減るものじゃないし」

睨むように少女は怪盗を見て少しため息を吐いた。

確かに減るものではないが見知らぬ人、しかも怪盗に情報を教えて気持ちのいい人などいないだろう。

言うか言わざるか戸惑う少女に真剣に少女を見ている怪盗。

少女は半ば諦めモードに入って出来るだけ怪盗と目を合わさないように逸らしつつもゆっくりと口を開いた。

「工藤君の話では通り魔にあつたらしいの。私が襲われている時に偶然その場所に遭遇したあの写真に写っている人が私を庇って拳銃で撃たれたって…私も何発か打たれたらしいけど」

「…へえ」

「人のことを散々聞いといてそれだけ？まあいいけど」

そう言つて少女は食べ終えたお皿を流しに置いてコーヒートを淹れた。

「貴方も飲む？」

「あ、うん。イタダキマス」

怪盗の言葉を聞くなり少し多めにコーヒート豆と水を淹れてセットする。コーヒートを淹れている間は二人とも無言であり、また空気が重く感じられた。

(やっぱり根掘り葉掘り聞くのは失敗だったかな?)

しかし工藤新一はこの記憶のない少女にどう嘘をついたのか気にな

った。

怪盗は少女を知っていたのだ。初めて少女の存在を知ったのは今から七年前。自分が十七歳で少女が七歳の時のこと。いや、少女は偽りの七歳だが。

(それじゃ彼女が組織の人間だったことも、本当は二十代前半だったことも知らないのか)

そして少女の本名が宮野志保だということも。

しかしそっちの方が逆に少女にとって幸せなのかもしれない。辛い過去のこと、自分が殺人犯だったことも全て忘れて今は足が不自由なのはあれだが、それ以外は幸せに暮らしている、と思う。

(…彼女は本当に幸せなのだろうか)

記憶はなくてももしかしたら恋心はまだ消えていないのかもしれない。

七年前に少女が抱いていた恋。それは第三者からでも分かってしまった。

しかし時は残酷で少女の目の前で大切な人を亡くし、少女はその彼を守って倒れてしまった。そして次に少女を襲ってきたのは大きな爆発。その時怪盗はもう少女は死んだと思った。

そう思ったのに…少女は成長して今、目の前にいる。

目の前の少女がああ灰原哀だと分かった時、無性に少女を抱きしめたくなった。

そうだ、これは怪盗に送られた最高のクリスマスプレゼントだ。

(いつも物を盗んでいる俺にもクリスマスプレゼントが届くなんてな)

怪盗は虚しい声で笑った。

いつの間にか外は雨から雪へと変わり、淹れてもらったコーヒーの温かさに怪盗は少しだけ安堵した。最初の頃と比べてリラックスしてきている。まるで初めて来る場所ではないくらいに。

「ねえ、暫くこの家に居てもいい？」

無意識に出た言葉に少女は目を丸くして怪盗を見た。

「暫くつて？」

「さあ？」

「さあつて…：そんなの無理に決まってるじゃない。ましてや怪盗をここに住ますなんて前代未聞よ」

「だけど哀ちゃんは優しいでしょ？」

「…は？」

「うん、哀ちゃんは優しいよ」

少女は大きく目を見開けた。

「貴方…私のこと知ってる？」

怪盗は薄らを笑った。その微笑みが少女にとって確信に近づき、思い切り立ち上がる。そのせいで椅子が倒れたがそんなことは気にせず、真実を見つけたような顔で怪盗を見ていた。

「…だとしたらどうする？」

「私についての真実を教えて欲しいの」

「真実？」

「そう、きつと工藤君が言っていたことは嘘だからやっぱり知っていたのか。怪盗は思った。

少女は人の感情に敏感だったのは覚えている。工藤新一の毛利蘭に

対する恋愛感情も人並み以上に感じ取っていた。

(やっぱり嘘を隠し通すのは無理みたいだぜ。名探偵)

彼女はお前が思っている以上に簡単に操れる人ではない。

真剣な眼差しの少女に降参の合図をだして諦めたように怪盗は口を開いた。

「哀ちゃんのこととはちょっとだけ知ってるよ。でも何があったかは分からない」

「…そう」

期待はずれな答えを言われて少女は肩を竦めた。

「ごめんね、本当は知っている。

でもこれ以上君を傷つけないから。

だから…」

「明日に俺の荷物ここに持って来るね」

「…まだいいって言ってないけど」

「いいじゃん、家族が一人増えるのも悪くないでしょ？」

お互い一人でいるのはやめよう。

そう言われたような気がして少女はまた目を丸くさせた。

確かにこんな広い部屋、一人で暮らしてきて寂しくはないと思っただことはないとさえ嘘になる。特にこの時期は温かい家族を見るたびに寂しくなっていた。

「それじゃ貴方は私のクリスマスプレゼントなの？」

「まあそういうことになるかな」

子供っぽい笑顔を振りまきながら怪盗は言った。

そう、記憶を失ってからは一度ももらえなかったクリスマスプレゼント。それがこの怪盗なのは少々不満があったが嫌ではなかった。

「…勝手にすれば？」

少女はそれだけを告げてリビングを出て行った。

今の言葉は了承と取ってもいいのだろうか。

少女の性格をあまり知らない怪盗は一晩中悩んだのであった。

## さみしさ売買（後書き）

意外にキッドと灰原さんってワンツーマンで話したことなんです  
ね。何か気が合いそうだけど。

あと、キッドの家族構成はてきとうです…。

タイトルは発光様（<http://iknowa.web.fc2.com>）から頂きました。ありがとうございます。



心がわりせぬことは、恋愛の妄想である（前書き）

新一と哀のお話。（オリジナルキャラクターあり）

## 心がわりせぬことは、恋愛の妄想である

「聞いてよ！！宏人ったら私という彼女が居ながら『ごめん…俺はあいつのことが好きなんだ…』だってさ！！ふざけるのも大概にしるって！！！！」

「え！？マジで？中川君ありえないでしょう！？絶対に騙されてるって！！」

「でしょ？ただ偶然に席が隣になって消しゴム拾ってくれただけでだよ？ってかさ、あの子もあの子だよ。そもそも宏人に気がなかったのなら消しゴム落としても拾うなって」

「でもあんな美人な子は何にも悩みなさそうで羨ましいよね。だってそこに立っているだけで何人も男が寄ってきそうだもん」

「そうだよねえ。なんかついでの人の男も持っていきそう」

「もう、言い過ぎだってー！！」

そんな会話を陰で聞きながら少女は下を向いた。

きつと今彼女たちが話していることは自分に関わりがある事。だって彼女たちの話の内容は以前自分がした行動とびつたり当てはまる。

偶然に自分の足もとに転がってきたまだ新しい消しゴム。そして隣の男の子が困ったように自分の足もとを見ていたので、ただ良心で拾ってあげただけなのにまさかその三日後に校舎裏まで呼び出されてしまうとは思いもしなかった。

『初めて話してくれた時の君の笑顔が忘れられなかった』  
そんな言葉を言われたような気がする。

しかしそんな言葉もなかったかのように「ごめんなさい、今は付き合いたいと思わないの」の一言であっさりと言白は終了し、また何の変哲もない日常が始める。そう思っていたのだが神様はそんなに優しくはなかった。

『ねえ灰原さんも確か電車通学だったよね？俺もそうだから一緒に帰ろうよ』

この男、思ったよりもともしつこかった。

告白された次の日、何事もなく黒板に書いている文字を写していると隣から一枚の紙が送られて隣を見ると昨日告白してきた彼が紙を指さして『読んで』と口だけを動かした。

きつとこれは自分宛てだろう。今は授業中で周りの皆は試験前だから真剣にノートを取っている。

(授業の邪魔はして欲しくないけど)  
しかしその紙の内容を読まない限り、隣の彼はジッと自分を見続けているだろう。

それもそれで気が散るので仕方なく紙を開けてみれば『今日の放課後に教室で待ってて』なんてまるで恋人同士かみたいな内容に一気にやる気がなくなった。

本当はこんな紙なんてどこかに捨てて帰ってやるうかと思った。否、本当は帰るつもりだったのだが校舎を出るか出ないかの間で携帯電話

話を机の中に忘れてきたことに気が付いて教室に戻ると案の定、隣の彼の姿があった。

哀は引き返したい気分になったが目の前の彼はそんなことを許す由もなく哀の腕を掴んで単刀直入にこう言った。

『他の奴らは簡単に諦めてくれたと思うけど、俺は君を諦めたわけじゃないから』

何を突然に。だなんて哀は顔を顰めて彼を睨んだ。

確かに告白してきた人たちは自分に釣り合わないと思ったのだろうか、それとも自分がそう易々と告白を受け入れてくれるわけがないと思っただろうか一人たりとも再リベンジをしてくる輩はいなかった。

そして今回もそのパターンだろ思っていたが目の前の彼、中川宏人は生憎簡単に操れる人ではない。

『…月城さんはどうしたの？』

哀は淡々と言った。

月城奈々。隣のクラスの女の子であり、中川宏人の恋人である。

それは奈々の友達が皆に言いふらしたからか、それとも密かに奈々が皆に言ったからか、その噂は全校に広がり、哀の耳にも届くほどであった。

『奈々となら君に告白する前日に別れた。ちゃんと理由も言っただけな』

『理由って…貴方まさか』

『ちゃんと「俺は灰原さんのことが好きだ」って言ったよ』

宏人の得意気な話し方に哀は肩を落とした。

たった一回、消しゴムを拾っただけなのに何故自分はこの事態に巻き込まれねばいけないのか。  
どうやって宏人の気を自分から遠ざけることが出来るかを哀は考えた。

\*

そしてそれから一週間がたったが宏人の熱烈なアプローチは途切れることはなくクラスやましてや学年中にも宏人の哀に対する行動に不審を感じ、それと同時に宏人と奈々が別れたという噂が広がった。

そして哀が教室に行こうとしたときに隣のクラスから聞こえた声は奈々とその友達の声。隠れるように聞いているとやはり話の内容は宏人と哀のことだった。

(何で私が巻き込まれなければいけないの?)  
哀は溜息をつきながらも思った。

大体、自分は宏人と付き合っているわけでもなく告白を丁寧に断ったのだ。それなのに宏人の彼女《今は元彼女だが》にこんなにもボロクソに言われなければいけないのだろうか。

今どきの高校生はとてつもなく恐ろしい。まるでこの前見たイジメ

のドラマに似ているのではないかと精神年齢二七歳が思ったところで解決するわけでもなく哀はこの話は聞かなかったことにして自分の教室のドアを開けた。

\*

そしてもう一つ、哀にとって大いに困る出来事があった。

「灰原 飯まだかあ？」

「…」

思わず『家を一軒間違っていますよ』なんて突っ込みたくなるほどのくつろぎ方をしているのはあの高校生探偵で有名だった工藤新一。もう二六歳だから立派な社会人として探偵事務所を建てている。だが警察の応援がほとんどのためにあの事務所は今や廃墟と化していると工藤探偵事務所の近くに住んでいる光彦からそう聞いた。

そもそも哀は隣同士だということにここ三か月くらい新一の顔を見ていなかった。

それは新一と哀の時間帯がバラバラなのか、それとも哀が新一を無意識のうちに避けていたのかその点は分からない。

しかしある日、阿笠邸に帰ると何食わぬ顔で新一が哀を見てこう言った。

『灰原、飯くれ』

三か月ぶりに会ったにも関わらず再会の挨拶もなく第一声がこれだ。いつも冷静な哀もこれには驚きを隠せず手に持っていた鞆を落とす。

何故急に彼がこの家に居るのか。哀はわけも分からず三人分のご飯を作ってテーブルの上に並べるとまるで野生の犬のように勢いよく並べられた料理に手を付ける新一に哀も博士も啞然としてその光景を見ていた。

新一の話によると食料《主にコンビニ弁当やカップ麺》が底をつき、買に行くのも面倒だと思つた矢先、阿笠博士と出会つて何とかご飯を分けてくれと頭を下げたとか。

心の優しい博士は以前会つた時よりも顔色の悪い新一を見て同情したのだろう。快く家に入れてくれたがきつと顔色の悪い原因は日常生活の関係だろう。バランスの悪いインスタントをご飯として、その上徹夜しているのだ。誰だつて顔色は悪くなる。

全てを理解した哀は『今日だけだから、分かつた？』と念を押して言い、新一は哀の作つた料理を食べながらも首を縦に振つた。

しかしそれは動作だけであつて哀の振る舞つた料理があまりにも美味しかったからだろうか、それともここに来れば何もせずに料理が出てくるとインプットしてしまつたからだろうか、その翌日も新一は平然にここに来ると『灰原、飯』なんて言つて、三人掛けのソファの真ん中に座る。

そもそも蘭はどうしたのか。確か新一と蘭は一年前にやつと付き合いつたと偶然会つた園子から聞いた。

料理上手の彼女なら新一のために料理を振る舞うことはもちろん、洗濯や掃除もしてくれそうなのに新一は蘭の話は一切せずに事件の

話やミステリー小説の内容を一通り話し出す。まるで哀の話の聞かないかのように。

だから哀は蘭の話をしようにしてもそれを許されることはなかった。そして一通り話が終わったかと思うと、勝手に人の家《正確には阿笠博士の家だが》の風呂に入り、隣だというのに帰るのが面倒と言つて最悪では泊まることもあり哀は諦めたかのように新一の行動に流されていく一方であった。

そして今日ももう日常になりつつある新一の訪問に哀は肩を落としたりした。

「今日は魚の煮物の気分だな」

厚かましくリクエストまで添えてソファに座る新一を哀は睨むように見てそして料理の準備にかかる。

偶然に魚が冷凍庫にあり、きっと新一は勝手に冷蔵庫の中身を見たのかと把握。しかし言うのもだんだんと面倒になってきた哀は溜息をついて新一のリクエスト通りに魚を手を持った。

今日、博士は学会のために夜は遅くなると聞いて新一と哀は二人でご飯を食べた。

今日のご飯は新一のリクエスト通りの魚の煮物。目をパチクリしながら哀を見る新一に哀は「ただ今日のメニューに困っていただけ」と可愛くもない返事をして淡々とご飯を口にしたりした。

そして二人ともご飯を食べ終わると哀は台所に行って食器を洗い、新一はソファでミステリー小説を読む。それも習慣となっていて哀



は文句の一つも言わなくなった。

テレビも付けていないために静かすぎる家の中、ミステリー小説に熱中していた新一はふとハンガーにかけていた哀のコートの下に落ちている紙に目が行く。

毎日哀が掃除をしているため、チリひとつない部屋に落ちている一枚の紙。きつと哀のコートのポケットから落ちたのだらうと新一はその紙を拾い上げると何の躊躇もなく四つ折りにされていた紙を広げて中身を見る。

「…メールアドレス？」

そこに書かれていたものは小文字のアルファベットと数字が無造作に書かれていて見た限り誰かのメールアドレス。しかも丁寧には電話番号まで書かれていてそしてその一行下にはそのアドレスと電話番号の主であろう名前が。

(…は?)

新一はその名前を見て顔を歪ませた。

『中川宏人』と書かれている名前はとう見たって男の名前。しかもよく見れば紙の下の方に『いつでも連絡してね』なんて書かれていて新一の機嫌が徐々に悪くなっていくのが分かる。

「…何やっているの？私のコートに何か付いてた？」

食器洗いが終わったのか丁度いいタイミングで哀がヒョコリと顔を出して新一に話しかけた。

しかし新一は哀の顔を見ずにマジマジと持っていた紙を見続けてい

た。

哀は首を傾げながらも新一が見ていた紙を覗き見して啞然とする。

「…よく人のプライバシーを勝手に見れるわね」

呆れながらも哀は新一が持っていた紙をヒョイツと取り上げると目の前にかかっていたコートの中のポケットの中に戻す。

その行動が気に食わなかったのだらう、新一は頬を少しだけ膨らませて睨むように哀を見た。

「こいつとはどんな関係なんだ？」

「…別に、貴方には関係ないでしょ？」

いつもより低い声で言う新一だが哀は怯むことはなくソファに座って机にあった雑誌を開く。

しかし新一はその雑誌を取り上げて机に投げ捨てる。それに哀もさすがに腹立てたように新一を睨んだ。

「『中川宏人』とはどんな関係なんだ？」

もう一度、次は相手に名前付きでしつこくそういう新一に哀も苛立ちながら半ば投げやりに言う。

「一週間前に告白された人」

「…告白ってお前付き合うのか？」

「別に？でも顔も良いし私のこと本当に好きみたいだからもしかしたら付き合うかもしれないわ」

相当苛立っていたのか分からないが本当は振ったなんて言わずに満更でもなさそうな態度を取り、新一に挑発する。自分は蘭ではないのだからそんなことで新一を苛立たせられるなんて思っていないがこれが精一杯。どうしたら口喧嘩に勝てるなんて分からない。

まるで対戦前の睨み合いのような光景に先に折れたのは新一。目を大きく見開けて思いきり哀の肩を掴んだかと思うと少しばかり焦っ

ているようにも見えた。

「お前：十歳下のやつに興味あるのか？」

「十歳下でも体は同年代よ。私はこの姿のまままで過ごすとした以上、恋愛も体と同年代の人と付き合うのが普通じゃない」

「十歳上の人とは付き合おうとしても無理に近いわ」と言われて新一は黙った。

確かに十六歳の少女が二十後半の男性と付き合うということは周りから見て援助交際と間違われてしまう恐れがある。

否、哀はそんなことを恐れているわけではないがそんな二十代後半と付き合うより同世代の男性と付き合うのは世間一般の普通であり、そう簡単に二十代後半の男性と巡り合うわけではないと哀は言いたいのだろう。

しかしそんな哀の考えも新一が分かるわけなく掴んだ肩をより強く掴むと大きく息を吸って、

「お前は同世代とは似合わねえんだよ!!!」

大声でそう言うとな新一は「もう寝る」と言って新一の部屋と化した空き部屋へと足を進めた。

「…一体何なの？」

何で自分は新一に怒られなくてはいけないのか、そもそも料理を作っただけで感謝して欲しいくらいなのに。

それから蘭との関係も気になる。もしかしたらひよんなことで蘭と喧嘩をしたのでこの家に居座っている可能性もある。

(もう何で私がこんな思いをしなくちゃいけないの?)

宏人のことと言い、哀は面倒なことに巻き込まれ過ぎて頭を抱えた。

心がわりせぬことは、恋愛の妄想である（後書き）

哀ちゃんモテモテのお話。

一体何を書きたいのかわからない小説になってしまったよのような気がします。

タイトルはヴォーヴォオナグルの名言から頂きました。  
名言ってすごいですね！！

恋するハッピー・ラズベリー(1) (前書き)

恋する哀ちゃんのお話。(パラレル)何話かに分かれます。

## 恋するハッピー・ラズベリー(1)

St. Valentine's Day

世間ではそれをバレンタインデーとよんで好きな人、家族、友達にチョコレートを贈る行事とされている。

元々はローマ帝国の男女の恋がきっかけでバレンタインが出来たと言うがはっきりと言って、だからこの日に告白したら必ず恋が報われるということではない。そんなの誰だって分かっているのに何故人はこの日にチョコレートと共に愛の告白なんてするのだろう。

街を見渡せば何処もかしこもチョコレート。女子学生が「今度先輩に告白するの」なんて言いながらチョコを買っている光景を見て苦笑いをした。

(…誰だっこの日は浮かれてしまうものよね)  
そう思っている私もスーパーの袋の中にしっかりとチョコレートの材料が入っており人のことは言えない立場。

昨日、親友である吉田さんから『一緒にチョコレートを作ろう』と言われて私は首を横に振れなかった。

去年まではいくら吉田さんに誘われても『渡す人がいないからいい』なんて言ってたくせに一体どういう風の吹き回しなのだろうと自分でも思ってしまうが原因はとうに分かっていた。

そう、私は一目惚れしてしまったのだ。

それは家に帰る時のこと。電車通学の私は定期券を取るために鞆のチャックを開けて手を入れた時、財布を落としてしまった。財布を下ろしただけならまだマシな方だったが、運悪く財布のチャックも開いており大きい音とともに小銭を散らばってしまい私はその光景に愕然とする。

周りにいた人はその音と同時に哀れんだ目で私を見た。私は周りを見渡したが人は私から視線を逸らして改札口へと足を向けた。

だれもこの光景を見ても積極的に拾ってくれる人はおらず、最悪では目の前に落ちていているというのにそれをよけて改札口へと向かう人もいた。

（拾ってくれてもいいのに）

ムツとしながらもそう思ったが元々これは自分の不注意が招いたもので周りの人たちは誰も悪くない。しかしそんな冷酷な目で見なくてもいいじゃないか。

私は心の中で文句を言ったがそれよりも今散らばっている小銭を何とかしなくては。

スカートを押さえてその場にしゃがみながら小銭を一枚一枚拾い上げていく。その姿はきつと恥ずかしいものになっているだろう。

出来るだけ上を見ないで地面の小銭だけに目を向ける。拾い終わればすぐに改札口へ向かえばいいだけのこと。私はしゃがんだり立ち上がったりを繰り返しながら広い範囲に転がっていった小銭を拾うともう一つの手が私の視界に入った。

「……」

私は恐る恐る前を向くとそこには同じ年齢くらいの男の子がいて左手には何枚か拾った小銭。

「これ君のでしょ？」

「え、ええ……」

目を丸くしながら首を縦に振ると彼は私の左手に小銭を乗せて立ち上がる。



「次はちゃんと財布のチャック閉じとけよ」

「……」

しゃがんだまま私は何も言えずに改札口へ向かう彼の背中を見送っていた。

「あ、お礼……」

彼の背中が見えなくなったところに私はハツとして立ち上がる。それと同時に電車が発車した音が聞こえてきたのできつと彼は今の電車に乗ってしまったのだろう。

「言つの……忘れてたわ」

手から小銭の冷たい感触がして先ほどのことを思い出す。

自分より大きな手に柔らかな笑顔。思い浮かぶたびに胸の奥が高鳴るような気がして私はギュツと胸を押さえた。

これが彼との初めての出会いだった。

それから彼とは電車によく会うようになった。

『会った』といっても同じ車両に乗っているだけで話し掛けはしない。

過去に何度も話し掛けようとしたがもしかして自分のことを忘れているかもしれないと思ってしまうとなかなか勇気が出なかった。普通知りもしない人に話し掛けられると誰だって不審がるのが当たり前。私は彼に不審者とは思ってほしくなかった。

そしてそれから早数か月。

吉田さんにそれを相談したところ『恋』だと判明して私は少なからず固まった。

「偶然居合わせた彼が哀ちゃんを助けて恋に落ちる…何か少女マンガみたいで素敵ね!!」

「…あの、恋ってそんな大げさな」

「何言ってるの!? 恋に決まっているでしょ!!」  
身を乗り出して私に顔を近づけるとニコニコとして紙とペンを目の前に出す。

「ねえ似顔絵描いてよ。あと制服の特徴とか教えてくれたら嬉しいんだけどなあ」

どっちかと言うと相談に乗っている吉田さんの方がやる気満々で私は少しばかり引きながらも吉田さんが渡してくれたペンと持って紙に記す。

「…哀ちゃんって絵下手だね」

「…ほっといて頂戴」

昔から絵が苦手な私に描けなんて言った吉田さんが悪いのよ。

「ふむふむ…まあ顔は分からないにしろ制服の特徴によるとこれは隣のY中だね。あれ? でもあそこの中学って確かT駅の三個前だったような…まあいいよね。でも問題は顔だよねえ…この絵じゃ分からないし…」

「…悪かったわね、下手くそで」  
だって本当に特徴なんてないもの。近くで見たのは初めて会った時の一瞬で他は遠くからしか見られなかったのだから仕方がない。知っていると言えば黒髪で眼鏡をかけていることくらい。あとサッカー部なのかたまにサッカーボールを肩にぶら下げている。

「…つてことはY中のサッカー部の部員で眼鏡の少年を調べればいいのね!! 私そいうこと得意だから任せて!!」

「任せてって…もしかして」

嫌な予感がする。

今まで吉田さんと友達を三年やってきたが彼女のあんな顔をする時は口クなことがないと私なりに勉強してきた。あと友達のことです首を突っ込みたがる性格も承知済みで。

(だから吉田さんにはなかなか話せなかったのよ)

それを思ったのと同時に吉田さんはバンツと机を叩いて立ち上がる。

「私が彼のことを隅々まで調べてあげる!!」

…やっぱりそう言うと思ったわ。これで当分私の頭痛は治りそうに  
なくて早速頭をおさえた。

そしてそれから数日後、案の定吉田さんは一人でY中に乗り込み、  
色々な人から情報をいただいたらしい。

私が教室に入った途端、連行するように隣の空き教室に連れ出され  
て資料らしきものを机の上に出してはニコニコと笑顔を振りまく。

「昨日の調査結果よ」

「調査つて…」

まるで探偵でもなった気分の吉田さんを見て苦笑い。今の彼女なら  
きつと探偵帽子が似合うと思ってしまうた私も相当の馬鹿だ。

何となく資料に目を通してみるとそこには彼の関する情報がびっし  
り書いていて私も目を点にさせるほど。一体どこでこんな情報を入  
手出来たのかと聞きたきあったが怖くて口が開かなかった。

「まず、彼の名前は江戸川コナン。歳は私たちと同じ歳で成績優秀  
スポーツ万能その上容姿は上の中くらいで女子にはモテモテの王子  
様…だつて。哀ちゃんにしては珍しいね」

「…」

「そしてやっぱり彼はサッカー部に入っていてサッカー名門高校に  
も推薦がかかっているくらいに上手いらしいよ。さっき聞いてみた

けど私の中学でも彼、結構有名だったのよ」

「へえ……」

「へえ……じゃないでしょ哀ちゃん。彼が有名なほどハードルは高いんだよ。そんなのにのんびりしてたら誰かに取られてしまうんだから……！」

「私は別に付き合いたいとか……」

「ダメダメダメー！！好きになった限り告白して付き合うのが乙女の理想でしょ！？いい加減哀ちゃんも乙女心を取り入れなくちゃ」  
まるで自分のことのように必死になって吉田さんは私に写真を差し出してきた。

一体どこで隠し撮りしてきたのだろうか、ばつちりと彼の顔が写っていて私は少し胸が鳴った。

彼のことは好きなのは認めよう。毎朝彼に会うのが楽しみでならぬのは事実なのだから。

しかし今は毎朝こうして彼の顔を見られるだけで幸せなのだから無理して声を掛けたり、ましてや告白なんてしたくない。もしかしたら告白して振られた場合のことを考えるとその後、彼に顔を合わせられるかと聞かれれば絶対にそれは無理だと答える。彼の顔を見る度に私も悲しくなるし、彼の私の顔を見ると気まずくなるだろう。

だから私は今のままが一番いい。

告白なんか……しない。

「それじゃ哀ちゃんの後悔するよ！？初恋の人に告白も出来ないなんてやつぱりダメだよ！！神様が許しても私が許さない！！」

「……え？」

「好きな人が出来たら告白する。それ常識!!」

「あ…はい？」

「私だつて初恋の告白は緊張したよ？もし振られたらどうしようなんて思つたし、このままでもいいかな？なんて思つた。でも日が経つていくうちに『好き』つて気持ちは膨らんでこのままじゃ後悔するつて思つたの」

「吉田さん…」

「結局初恋は振られて終わつたけど…今じゃいい思い出になつてる。ちゃんと次の恋も出来たし今だつて光彦君つていう彼氏もいるしね」  
吉田さんは私の肩に手を乗せて真剣な目で私を見た。

「哀ちゃんも私のこの気持ちを理解してほしい。だから…頑張ろう!!もうすぐバレンタインつてことだし一緒にチヨコ作つてさ、チヨコ渡すついでにパパッと告白しちゃおう!!」

「…」

結局私は吉田さんに流されるままにチヨコ作りをすることになった。

バレンタインの一週間前の出来事だつた。

## 恋するハッピー・ラズベリー（1）（後書き）

バレンタインデーのお話。

書いている途中から蘭と園子っぽくなってしまって「やっぱり蘭の話にしようかな」と思ったけどやっぱりやめましたっていう。

蘭ちゃんは蘭ちゃんです。違う話を書きたいなと思います。

タイトルはノアロー様《<http://scarlett.jellybean.jp/snooze/>》からお借りしました。ありがとうございます…！

恋するハッピー・ラズベリー (2) (前書き)

前回の続きです。

## 恋するハッピー・ラズベリー（2）

あれから数日後、吉田さんからメールが来て『明日の放課後に家庭科室で』と強制的にチョコレートづくりが始まった。

その前に材料を買わなくてはいけないので私は近くのスーパーでチョコレートや生クリームなどをかごの中に入れてレジに向かう途中にあるものに目を止めた。

「…ラズベリー？」

果物売り場にはいつもは置いていない冷凍されているラズベリーが透明のケースに入っており、私はまじまじとそれを見た。値段が書いていないということは売り物ではないのだろう。

しかしラズベリーは初夏頃が旬だと聞いたが今は真冬の季節。正反対なのではと思ったが近くに通るかかった店員さんが私を見て勘付いたらしく、私の隣に立ってラズベリーを一袋渡しながら言った。

「親戚の人が食べきれないと言って渡してくれたんだけど私も生憎ラズベリーなどの酸っぱいものが苦手だね。もし良かったら一袋持って帰りなさい」

「…え？でも」

「まあこのケースに置いてある理由はこうするためだからね。残念ながらみんなは目を通してくれないけど君が目を通してくれて良かった」

「あ、はい…」

そういえばこのスーパーは家族経営だと聞いた。だから他のスーパーよりは遙かに小さくてお客さんの通日も悪い。最近大型スーパーが近くに出来たのが理由だろう。

でも私は大型スーパーよりこの方が何だか居心地は良かった。

「ありがとうございます」

「いいよ、チョコレートづくり頑張ってるね」



店員さんがかごを見て言った。

チョコレートや生クリーム、ほかには小麦粉などを入れていたのできつとそう思ったのだろう。私は赤くなりながらも先程もらったラズベリーをかごの中に入れてレジへ向かった。

「ラズベリーチョコ？」

「うん、折角ラズベリーもあるからさ、それ作ろうよ」

吉田さんは器用に携帯を操作しながらラズベリーチョコレシピのホームページを開けて私に言った。携帯をみるとそこにはラズベリーチョコタルトやラズベリーチョコサンド、色々な種類が一覧にありどれを作ればいいのか困ってしまうほど。

自分で言うのも何だが一応料理は出来る方でいつもご飯を作っているのも私だ。しかしお菓子づくりは正直初めてで泡だて器なんて使ったことがない。本当にこんなもので美味しいお菓子が作れるのだろうかと泡だて器を見て思ったのは吉田さんには言えなかった。

「ねえ、このラズベリーチョコケーキなんてどう？チョコケーキにラズベリー挟むだけだから簡単じゃない」

「…ええ、私は構わないけど」

「じゃあそれに決定ね！！早速調理開始　！！」

いつもよりも自信あふれている吉田さんに圧倒されながらも私は板チョコを割り始める。

幸い吉田さんは何度もお菓子づくりを経験していたので分からないところがあれば安心して聞けた。

チョコケーキが完成していく度に頭に浮かんでくるのは彼のあの笑顔、電車の中で見る仕草。このチョコケーキを渡したら彼はどんな顔をしてくるのだろうか。またあの笑顔で『ありがとう』なんて言

つてくれるかしら。

無意識に頬が吊り上り、それを紛らわせようとチョコクリームを思いきりかき混ぜた。

それは吉田さんも同様でスポンジの生地が入っているオーブンを見ながら「ふふふ」と微笑みが零れているのが分かる。きつと円谷くんのことを考えているのだろう。

恋をするのはこんなに楽しいとは思わなかった。

前に吉田さんが言っていたことは何となく分かった。

「出来た」

「出来たね」

ケーキを見ながら私たちは呟いた。

見本ほど綺麗にはいかなかったが味は保証できるラズベリーチョコケーキ。食べやすいように一口サイズに切りそろえて上に余ったラズベリーをちょこんと乗せると完成。

我ながらうまく言ったと吉田さんはうんうんと頷いて余ったケーキを口にした。

「うん、味も美味しい。これなら心配なく光彦君にあげられる!!」  
「…そうね」

喜ぶ吉田さんとは反対に私はなんだかそわそわしてならない。

遂にこの時が来たと思わんばかりにチョコレートケーキを見た。

(…本当に告白しなければいけないのかしら)

チョコレートを渡して前のお礼《彼は忘れているかもしれないが》  
だけじゃ駄目なのか。

チラリと吉田さんを見ると思いきり目が合った。

「哀ちゃんも遂に告白だね!!大丈夫、このケーキがあれば相手なんてイチコロだよ」

「イチコロって…」

「駄目だよ、そんなに弱気になっちゃ。告白は強気が一番だからね」  
「…本当にしなくちゃいけないの？」

「当たり前じゃん、何のためにこのケーキ作ったのよ!？」

「…そう…よね」

声になるかならないかの音量でそう呟いて余ったケーキを一口食べる。

中に入ったラズベリーのせいかわいというより甘酸っぱかった。きつと甘いのを苦手な人でも食べられるように吉田さんが調節したのだろう。

(…彼は甘いのは苦手なのかしら?)

それよりも情報では凄く人気のある人だ。当日だってチョコを紙袋に入れて持って帰るに決まっている。そんな日に私なんか彼にチョコケーキを渡してもいいのだろうか。

(何だか考えれば考えるほど渡し難くなってきたわ)  
そんなことを思いながらも時間は刻一刻と過ぎて行く。

バレンタインの二日前のことだった。

そしてついに来た二月十四日の放課後。

吉田さんが言う作戦とはこうだ。

放課後になったら彼とすれ違わないようにY駅の改札口で待ち伏せをして彼が来たらチョコと一緒に愛の告白。

話せば話すほどテンションが上がって行く吉田さんとは裏腹に私は今日だけは彼に会いたくなかった。

今日だって電車で彼の姿を見たが、既に片手にはチョコらしきものを持っていて私の気持ちは徐々に下がって行くのが分かってしまう

ほど。

片手に持っていたチョコケーキを見てため息を吐いた。

（出来ればもう帰ってしまいました。なんて言ってくれないかしら）  
だつてたつた一回だけ話した人にチョコを渡すのだ。彼だつて私のことを覚えていてるかどうかわからないのに……。チョコを渡して告白したのはいいものの彼が困惑した態度を取ってしまったらどうしよう。

気持ちがだんだんネガティブ思考になつて私は思いきり両手で頬を叩く。

周りを見れば今日は特別な日だからだろうか、恋人たちが寄り添う光景が沢山見られる。

近くのベンチに座つてチョコを食べている恋人や、チョコの代わりにおそろいのアクセサリを渡している恋人。

だんだんここにいることに恥ずかしさを覚えた私は今日は諦めようと改札口に入ろうとした時、毎日見ている特徴的な黒髪が私の視界に映った。

そう、あれは紛れもなく彼の姿。

私の予想通り、紙袋いっぱいチョコレートを手に持ちながら重そうにこちらに向かつてくる。

（…どうしよう）

今頃慌てるのはもう遅い。折角彼に会つたのだからチョコを渡して告白しないと明日吉田さんに凄い剣幕で言い寄られるのは間違いない。

だんだん近づいてくる彼に私はチョコケーキが入っている袋を思いきり握りしめ覚悟を決める。

（あの時のお礼も兼ねてつてことにしておけばいいわよね）

うんうんと自分で納得して近づくと彼に私からも近づいて声を掛けようとした時

「コナン君!!」

彼の後ろから女の人の声が出て私は声を上げることは出来なかった。そしてパタパタと走ってやってきたのは黒髪の女の子。大人な顔立ちのその人はきつと大学生くらいだろう。笑顔がとても眩しかった。彼も彼女の声に気付いて振り返ると軽く片手を上げた。

「コナン君!!今帰り?」

「そうだよ、今日は早めに終わって」

「そっかあ…しかし今年も沢山もらったね」

「あ、うん…食べられるか心配だよ」

苦笑いする彼に彼女は手を口に当ててクスクスと笑う。

私は嫌な予感がしてならない。二人一緒にいる光景を見たくないと思っただが体がいうことを聞いてくれず私はその光景を目の当たりにした。

彼女が鞆から出したものはやはりチョココレート。

「沢山もらって困っているのは分かってるけど…私のももらってくれないかな?」

やや控えめに彼に私彼女の表情はとても可愛らしくて私は嫉妬を覚えた。嫉妬っていつても付き合っていないのは当たり前、まだ全然話したこともないのに馬鹿馬鹿しい。

より強くチョコケーキが入った袋を握りしめて手に爪の型が入ってしまいそうなるがそんなの気にしていられないほど私の思考は真っ白になっていた。

そして控え目に前に出す彼女に彼は優しく微笑んでそのチョココレートを快く受け取った。

「当たり前だよ。特別なんだから」

その言葉に私の思考が止まった気がした。

(特…別…?)

もしかしたら…否、もしかしなくてもあの二人はそんな関係だったのか。そんなの二人が話したときから想像できるのに彼の放った言葉で確信するなんて自分らしくない。まるで恋に溺れた少女みたいだ。何私だけ舞い上がっているのだろうか、本当に馬鹿みたい。一気に冷めていく気持ちに強く握りしめていた袋をコトンと床に落としました。

(こんなもの…作らなければ良かった)

涙が出そうになった矢先、彼が振り返って私を見る。目が合った瞬間、彼が目を見開くのが分かった。

(もしかして私のこと…知ってる?)

どうしようと思った。こんな光景に自分の入る隙なんてない。ましてやチヨコを渡して告白するとか彼女の前で出来るはずもなくジッと見つめている彼に私は咄嗟に鞆から定期券を取り出してホームへ逃げ込む。

途中、彼の声がしたような気がしたがきつと気のせいだろう。彼が私を呼び止める理由が見つからないのだから。

丁度来ていた電車に乗って肩で息をしながら壁にもたれる。その時、床に落としたままチヨコケーキを思い出して「あっ」と思ったが取りに行く気もなくして空いている座席に腰を下ろした。

あのチヨコケーキの意味ももうない。取りに帰ってもきつと虚しいだけだろう。

人が少ない車両の中、私は声を殺して泣いた。

初めての恋が終わった。

## 恋するハッピー・ラズベリー(2) (後書き)

次回が最後です。(すみません。やっぱり最後じゃないです)  
バレンタインに…間に合わないかなあ…。

タイトルは引き続きノアロー様《<http://scarlett.jellybean.jp/snooze/>》からお借りしました。  
ありがとうございます…!

恋するハッピー・ラズベリー (3) (前書き)

前回の続きです。

最後って言ってましたが文字数の関係で4つに分けます… (汗)



### 恋するハッピー・ラズベリー（3）

結局バレンタインデー当日は彼にチョコレートを渡せずに終わってしまった。

意外にもショックが大きかったらしく吉田さんから来たメールにも見向きもせずにと部屋の中に閉じこもっていた。

これなら最初から恋なんてしなえれば良かった。なんて後悔してはまた涙が溢れていく。

出来るなら彼と出会う前に戻してほしい。『恋』なんて知らない私に戻りたい。

しかし都合よくそんなことが起きるほど世の中は出来ていなくて私は膝を抱えてまた少しだけ泣いた。

「…フラれた？」

目を丸くさせながらもう一度言う吉田さんに私は笑顔で首を縦に振った。

「告白はしたの？ちゃんとチョコは渡せたの？」

必死になって詰め寄ってくる吉田さんはなんだか自分のことのように泣きそうになっていてフラれた本人である私が慰めてあげたいほど。しかししっかりと現実を伝えなくてはいけない。私の肩に手を置いてある吉田さんの手にそっと触れて私は首を横に振った。

「相手に彼女がいたの。年上の綺麗な人。その人の目の前でチョコなんて渡せなかったわ」

「…哀ちゃん」

「でも家族にあげたらすぐくおいしいって。きっと円谷君も美味しく食べているわ」

「……」

ごめんなさい。

私は嘘を吐いた。

吉田さんと一緒に作ったチヨコをあの改札口で捨てたなんて言えなかった。だってあんなに頑張って私のために優しく教えてくれて完成したチヨコを見て笑う吉田さんの顔を思い浮かぶたびに良心が痛む。

昨日いっぱい泣いたというのにまたあの光景を思い出して涙が出そうになった。出来れば吉田さんの前ではそんな姿を見せたくない。私は「ごめんなさい」と言っただけで教室を出た。

初めて授業をサボって初めて立ち入り禁止の屋上に足を運んで泣いた。

本気であの人のことを愛していたんだと思ってももう遅かった。

（馬鹿みたい）

…そうだ、彼にもし彼女が居なくても自分はフラれているのかもしれない。あんなに人気でチヨコも紙袋に入りきらないほどもらっている相手だ。告白して「付き合いましょう」と簡単にOKを出してくれる人ではないと最初から分かっていたはずなのに。

「…先走りすぎたのね」

恋をして舞い上がってしまったのだろう。吉田さんが恋をすると何もかも忘れてしまうなんて言っていたが本当にそうなってしまった自分が恥ずかしくなり私は涙を拭いて空を見た。

「そうよ…私は最初から駄目だったの」

告白してもしなくても彼と私は付き合い合う運命ではなかった。それでいいじゃないか。そう思わなくては彼のことを諦められない気がして私は彼を想う気持ちに鍵をした。

それから私は通学電車を一本早くした。そして帰るときも寄り道は

せずにまっすぐ帰って出来るだけ彼の顔を見ないように自分で努力した。

吉田さんも最初は暗い顔をしていたが今では私が恋をしていたことも忘れてしまったかのようにつきも通りに接してくれる。でもその方が私も気が楽であった。

一本早くした電車以外は彼と出会う前の日常と化していつの間にか私は彼のことをあまり思い出さなくなった。もしかしたらそれほど彼に恋焦がれていなかったのかもしれないと自己完結。彼も黒髪の彼女と仲良くしているだろうからそれでいいじゃないか。私は私で吉田さんがいったようにまた違う人を好きになっっていくのだろう。

しかし、ふと彼のことを思い出すと何故か寂しい気持ちになっていた。何故彼に好きだと伝えなかったのだろう。何故あの時チョコだけでも渡せなかったのだろう。そんな後悔をして泣きそうになるのはきっと私が彼を諦めきれない証拠。彼の思いを封印するなんて言っときながら出来ていない自分に嫌気がさした。

そして時は流れて三月。私たちは受験を終えて卒業式を待つのみ。吉田さんとは高校が離れてしまったが休みの日は遊ぼうねと涙ながらに言われて私は首を縦に振った。きつとこの先吉田さんとはこうして仲良く話したりするのだろうか。そんな気がして少しだけ嬉しかったのは内緒にしておく。

「いよいよ明日だね。卒業式」

「そうね」

「あー光彦君と高校も離れちゃったし…これから上手くやっていけ

るのかな」

「貴方達なら大丈夫よ。それに学校は違っても家は近いからいつでも会えるじゃない」

「そうだけどさ…光彦君違う女の人のところに行ったらどうしよう」

「円谷君はそんな人には見えないけど？今だって吉田さん一筋っぽく見えるわ」

「本当？」

「ええ」

見る見るうちに吉田さんの目からは涙が溢れてきて「哀ちゃん」と言っただけの胸に飛び込んできた。私は国立の高校、円谷君は有名私立の高校。一気に二人と離れ離れになるので吉田さんは寂しいに決まっている。そんな吉田さんを優しく宥めるのもこれで最後だろう。しかしその言葉は胸にしまつて彼女の背中をトントンと優しく叩いた。まるで子どもをあやしているかのように。

「…ねえ、哀ちゃんは本当にこれでいいの？」

「え？」

しゃくり声も徐々になくなっていつて泣きやんだかと思つた刹那、

吉田さんは私の顔を見るなりそう言った。

何を言っているのか分からない。私はそう思ったが何となく吉田さんの言っている意味が理解出来た。きっと彼のことだろう。

彼にフラれたと言つた当初は吉田さんも私を氣遣つてか彼のことをあまり話さなくなったが彼女のことだ、きっといつかは決着を付けなければいけないか思っていることを私は少しかり予想できた。しかし私は目を伏せてゆっくりと首を横に振る。「もういい」なんて呟くと私のシャツを握っていた手を話して向かい合うように座る。「哀ちゃんは本当に後悔してない？」

もう一度その言葉を聞いた瞬間、私の頭の中によみがえるあの光景。小銭を拾ってくれた時のあの優しい笑顔。電車に乗っているときの

あの眠そうな顔。そして最後に見た彼女に向けた微笑み。

『これ君のでしょ?』

「好きよ」

「哀ちゃん…」

「今も好き。諦めきれない…でも仕方がないのよ。彼には彼女がいるのだから」

「…」

「だからこの恋はもうおしまい。いつも通りに戻るの」

そう言っただけ私は鞆を持って席から立ち上がる。今日は卒業式前日から授業はお昼まで。帰りに何処かで買物でもしようかな。なんて考えていると後ろから椅子が倒れる音がして咄嗟に振り返った。

「…ダメだよ」

吉田さんが勢いよく立ちあがったせいで倒れた椅子。しかしそんなことを気にする様子もなく拳を震わせながらも溢れる涙をこらえて私を見ていた。

「吉田さん?」

「ダメだよ我慢しちゃ…例え彼女がいても告白はしなくちゃいけないの」

放心している私に歩み寄り吉田さんは優しく私を抱きしめた。

「後悔したままだとね、先に進めないの。新しい恋も出来ないの。」

私は哀ちゃんにそうなって欲しくない!」

「…」

抱きしめていた腕を放して少し下を向きながらも吉田さんは口を開く。

「あのね…江戸川コナンくん、中学卒業したらアメリカに行くんだって」

「え…?」

「しかもY中の卒業式は今日なの」

「…」

私は目を丸くして吉田さんを見る。彼女の情報は確實だからきつとそうなのだろう。

いきなりの報告で何をすればいいのか分からない私に吉田さんは叫ぶように言葉を発した。

「だから今しかないの！！今なら間に合うから早く行って！！！！」  
今日この気持ちを彼に伝えなければ一生この気持ちは封印されたままになる。それでいいじゃない、最初からこの気持ちは封印しようと決めたのだから。そう思う自分とやっぱりこの気持ちを彼に知って欲しいと思ってしまう自分。そして最後に出てきたのは彼に出会ったとき、彼が見せてくれたあの笑顔。

「…いつてくる」

私は小さくそう呟いて急いで教室を出た。

### 恋するハッピー・ラズベリー (3) (後書き)

次こそ最後…だといいな(おい)

もうバレンタインの話から卒業式の話になっちゃってますね…すいません。

もう三分の二くらい出来上がっていますので次回は早めに投稿しようと思います!!

タイトルは引き続きノアロー様《<http://scarlett.jellybean.jp/snooze/>》からお借りしました。  
ありがとうございます!!

恋するハッピー・ラズベリー (4) 最終話 (前書き)

前回の続き。次こそ最後です



## 恋するハッピー・ラズベリー（４）最終話

あの人に伝えにいかなくてはいけないことがある。

それはとても大事なことでこれを言わなくちゃ前に進めないような気がして私は誰の目もくれずにただ駅に向かって走った。

もう卒業式は終わって今頃は何処かへ行っているかもしれない。そして明日にはアメリカへ向かっているかもしれないと思うと私の心の中は不安でいっぱいになり涙が流れてきそうだった。

お願いだから間に合って。

全力で走って駅が見えてきたとき、私はピタリと足を止めた。

「…どう…して？」

私は目を疑った。

卒業を控えた生徒たちが改札口を通って行く中、違う制服の男の子がこちらを向いて立っていた。

あの特徴的な黒髪に眼鏡をかけた姿は遠くから見ても分かる。だって前まで電車の中でいつも見ていたのだから間違いない。

そこには彼がいた。

でもどうして？彼は何故卒業式を終えてここに来たのだろう。もしかしたら友達を探しているのだろうか。もしかしたら彼女と…だなんて思ったが今はそんなに落ち込んでいる暇はない。はっきり言うことは彼が誰を待っているかが私には彼に言わなくてはいけないことがあるのだから。

深呼吸して立ち止まった足をまた動かそうと思った時、後ろから来

た人に思いきり背中を押された。

「きやつ……」

私は少しだけ足がよろけて持っていた鞆を地面に落とした。それだけならまだマシだったが不幸にも鞆のチャックが開いたままだったため中に入っていたものが道路に散らばって私は啞然とした。

一斉にこつちを見る通行人。かろうじて転倒まではいかなかったが鞆の中身が全部散らばっただけでも結構恥ずかしい。これならまだ小銭の方がマシだった。

しかしやはり周りの人はそんな私の姿をただ見るだけで誰も助けくれようとはしない。そしてぶつかってきた人も謝りの一つもなしに改札口へと消えて行った。

(最悪)

彼が見ている目の前でこんな失態をしてしまった私はつくづくツイていないと思った。一生懸命作ったチョコは捨てる羽目になってしまい、初めて恋をした相手は告白もせず失恋してしまい、最後は告白を決めた直後にこれだ。神様は私のことが嫌いなのだろうか。その場にしゃがんで散らばったものを片付けていくうちに自分が情けないと涙が出てきそうになった。

(もう終わったわ。何もかも)

きっと彼は今頃友達と一緒にホームの中だろう。私はまた何も言えずにこの恋が終わった。

(最後に『好き』って言いたかっただけなのに……)

止まらない涙は下に落ちてプリントを濡らしていく。

多くの視線が私に刺さっていることに気が付いて慌てて周りのものを拾おうと思った瞬間、あの大きい手が視界に入ってきた。

「オメー、だからちゃんとチャック閉めとけてて前言ったよな？」

「……え？」

見上げるとそこには紛れもなく彼の姿。一瞬何が起こっているのか

分からないと頭の中が真っ白になった。

呆然とただ見上げている私に彼は小さく溜息を吐いて拾い集めてくれた教科書やプリントを空っぽの鞆の中に入れていく。

「お前つてしつかりしてそうに見えて結構ドジだよな」

「……」

言い返す言葉もない。

私は彼から目を離して小さく「ありがとう」と言うと大きな手が私の頭に乗って目を丸くした。

そうだ、のんきにお礼なんて言っている場合ではない。目の前にいる今がチャンス。彼に伝えなければ……。

しかしいざ告白をしようとする体が言うことを聞いてくれずに私は彼の顔を見ることが出来なかった。

「……これからは気を付けるよ」

彼の手が私の頭から離れて足を駅のホームへと向ける。

(ダメ……行っちゃダメ……！)

心の中で『動け……！』と叫んでも足は力を失くしたかのように動かない。

明日には彼がいなくなる。私も中学を卒業してもう電車を使うことは無くなる。

ああ、このまま私は彼に想いを伝えることは出来ないのか。動かない足にだんだん諦めも見えてきて一気に全身の力が抜けた。

でもそれはそれでいいのかもしれない。どうせフラれるのだから伝えない方が彼のためだろう。誰だって自分に好意を寄せている人をフツて気持ちいいって人はいないのだから。

『……ねえ、哀ちゃんは本当にこれでいいの？』

ふと後ろからそんな声が聞こえたような気がした。

…これでいいわけないじゃない。何か月も彼に想いを寄せて、あの時も彼の事ばかり考えてチヨコを作っていた。そんな恋をこんな形で終わらせるわけない。だんだん遠くなる彼の姿に私は衝動的に呼び止めるように思いきり叫んだ。

「好きなの！！！！！！」

盛大な告白は彼だけでもなく周りの皆まで私に振り向くほどのものであり改札口に向かう足は一斉に止まった。

こんな大声を上げる告白なんて随分昔に見たテレビを見た以来だと自分で叫んどきながら思ったが、不思議とその時は恥ずかしいと思わなかった。

そして唯一つ思ったことは改札口の手前にいる彼を何とか引きとめること。今日言わなければいつ言うというのだ。何度も言うが彼は明日にでもアメリカに向かう可能性があるのだから。

「貴方に彼女がいるのは知ってる。でも今言わなくちゃ貴方アメリカに行っちゃうから…私、きつとこのまま一生後悔すると思うから

……」

自分の中の想いを全て彼に言った。

やっぱり私は貴方のことが好き。

そう思った矢先、周りが妙にざわついていたのに私は気が付いてここは駅前だと再度認識させられた。

私はここで大声を上げて告白したのだ。告白している最中は何も感じなかったがいざ終わって彼の返事を待つ<sup>こっせつされるのがオチだが</sup>ているとだんだん周りの

目に気にし始めて私は顔を見られないように下を向く。

駅前には私を知っている人もいて「あの冷静な灰原さんがこんなことをするなんてね…」なんて面白そうに呟く声も私の耳に届き、穴があつたら入りたい状態に陥っていた。

しかし告白をして逃げるわけにもいかずにその場に立ち尽くす。

（ああ、もう最悪だわ…）

明日はきつとクラス中がこの話題でいっぱいになるのだろう。卒業式だけは爽快な気分であったのに。

そう思いながらも泣きたくなる感情を抑えて小さくため息を吐くとトントンとリズムいい足音が聞こえてきた。その音は次第に大きくなり私は顔を上げると同時に腕を思い切り引つ張られて強制連行されるかのようにだんだん駅から遠のいていく。顔を上げるとそこには赤面した彼がいた。

「…オメ はよ、普通あんな大勢の前であんなこと言うかあ？」

「…」

連れてこられた場所は誰もいない公園。こんな場所三年間通っていた私さえ知らなかったというのに何故彼は知っていたのだろう。しかしそんな問いかけも出来ないくらい私はこの状況に緊張していた。私はどうしてここにいるのだろうか。そして目の前に彼の姿はもしかしたら幻だろうか。

間抜けな私の顔に彼はため息を吐いて隣のベンチに座り込む。

「…ごめんなさい」

「ん？」

「貴方に彼女がいたのは知ってるわ。私はあんな綺麗な人にはかなわないっていうのも知ってる。でも告白しなくちゃ後悔するって思っ  
つて…」

「…」

「明日でもいいと思ったけど、貴方アメリカに行っちゃうから今日しかないと思って」

「……………ん？」

「だから私は貴方に」

「ちよつと待て」

私が言い終わる前に彼が手を出してきて私の言いかけた言葉を停止させた。私は驚いて彼を見るとその彼も何を言っているのか分からないと言っているような顔で半ば混乱している。その表情に私も少し顔を顰めた。

「…まず聞いてもいいか？誰が明日何処へ行くって？」

「貴方が明日アメリカに」

「…ええ！？」

「……………え？だつて」

「いや、いやいや…え？俺がアメリカに？」

「そ、そうだけど……………え？」

もしかして…否、もしかしなくても

「…騙された」

「え？」

「いえ…こつちの話」

頭を抱えて下を向く。きつとアメリカに行くという話は吉田さんが作った話。いつまでも告白しない私にしらを切らせて言った嘘なのだろう。しかしその嘘があんな大胆な告白につながるとは吉田さんでも予想できなかったに違いない。

たちまち恥ずかしさが込み上げてきてまともに彼の顔を見られなくなつた。

「ごめんなさい」

そんなことしか言えなくて今すぐここから一目散に逃げ出したい気分。しかしきつと目の前にいる彼はそんなことを許してくれるはずはなく困つたような顔をして私に声を掛けるか掛けまいか悩んでいた。

迷惑をかけてごめんなさい。

アメリカには行かないにしろ彼には彼女がいるのだ。私は彼を一日でも早く諦めなければいけない。彼が今困っているのはきつと私にどうすればいいのか分からないから。

大好きな彼を困らせたくないと思った私はベンチから立ち上がって彼を見るとぎこちない笑顔を見せながらも終止符を打った。

「…ありがとう、最後に貴方に好きって言えて良かった」

貴方に会えてよかった。恋は思ったより辛いものだったけど、思ったよりも楽しかった。嬉しかった。貴方を見る度に嬉しくなったこの想いは本物だったから…恋をして本当に良かった。

一方的に想いを伝える形になってしまったけど私はこれで満足している。だから…

「バイバイ」

泣き顔を見られる前に私は逃げるように走った。これでもうおしまい。彼から離れた途端にまた涙が溢れてきて一体今日は何回泣いたら気が済むのかと自分自身に問いかけても誰も答えてはくれない。でも泣くのはこれで最後。これからはこのことをバネにしてしっかりと前に進んでいこう。

涙を手で拭って前を見るとそこには先程まで人通りが盛んだった駅前。今はまるで景色が変わったように誰もいなくてただ改札口に駅員が眠気と戦っているように虚ろとしているだけ。

私は一呼吸して鞆の中から定期券を取り出すとゆっくりと前へ進む。もう改札口を通ると彼に会えないだろう。今までのことを頭の中で振り返りながらもカードを翳そうとした時、後ろからものすごい力で腕を引っ張られて足がよろめいた。

「何が『バイバイ』だよ。ロクに人の話も聞かねえで一人淡々と話  
しやがって」

「…なん…で？」

「ってかお前俺のこと色々と勘違いしすぎ。何が『アメリカに行く』  
だよ、『彼女がいる』だよ。俺はどこにも行かねえし彼女もいねえ  
よ」

先ほどとは打って変わったように機嫌がすこぶる悪くなっている彼  
に私は啞然とするしかなかった。

否、その前に彼は今なんて言った？

「…彼女…いないの？」

その言葉が癪に障ったのか眉をひそめながらも「悪いか」なんて言  
いたげな顔をしていた。

ただあのバレンタイン当日の出来事は一体何だったのか。黒髪の  
女性と仲むつまじく話していたではないか。『特別』だなんて言っ  
てまるで恋人同士のように。

私はそれを問いかけると彼は目を丸くしてお腹を抱えて笑いだした。  
私は何か可笑しいことを言ったのか。

「お前本当に勘違い多いよな。あの人は俺の親戚のお姉さんだよ」

「お、お姉…さ、ん」

「そうそう。お前って意外にお茶目な一面あるんだな」

未だに笑っている彼に私は力チンときた。

大体私のことなんて知らない癖にそんなことを言わないでほしい。  
そんなことを言うって私だって同じだけど私は彼のことをいつも見て  
きた。電車の中の数分だけだけど数カ月も見ていると少しだけだが  
彼の性格が分かってしまうのだ。

朝が弱いことも、サッカーが好きなことも、推理が好きなことも全  
部。



「…私はずっと見てたの」

しかし言える言葉はそれしかなくて言葉足らずな自分に嫌気がさした。それでも黙って彼は私の言葉を聞いていた。

「電車の中の数分間でも私は貴方を見るだけで嬉しかった。満足だった。でもやっぱり気持ち膨らんでいくばかりで……ああ、もうどう言ってもいいか分からない」

「おめっ…」

「とにかく…覚えてないかもしれないけど落とした小銭を拾ってくれた時からずっと好きだったの」

半ば投げやりに言ってしまった。

彼は驚いて目を見開いていたがそれはこっちがするべき顔だ。ついさっき告白したっていうのに何で彼が驚く必要があるのか。

しかし彼の表情は次第に微笑みに変わって私の肩をそっと触れた。

「…そうか」

「…」

「あの時からか…よかった」

「…え？」

「あの時勇気出してこの駅に来てよかった」

(…何を言っているの?)

そう言えば何故あの時彼はあの駅にいたのだろうか。そして今日も友達と会う予定だとその時は思ったが今日の様子を見てどうやらそのつもりではないらしい。首を傾げながら笑う彼を見ると「まだ分かんねえの?」なんて言った。

「お前の名前は灰原哀。俺と同じの十五歳だろ?」

「え?何で私の名前…」

「…容姿は学校で五つの指に入るほどの美貌で男子生徒に偉大なる人気があり他校にも知られている」

「…」

「まあその情報はお前知らないと思うけどさ、意外に鈍感だし」

「ど、鈍感って」

「だってお前俺の気持ちにまだ気づいていないんだろ？それだけでもう鈍感だよ」

「…え？」

そして彼は両手を私の両肩に乗せて私の目をジッと見る。

「俺も前からお前のことが好きだった」

これは夢だろうか。そうだ、これは夢だ。私が勝手に妄想しているだけの世界。

叶わない夢だからそうならいいなと思っっていることを勝手に空想化しているだけ。

夢なら覚めないでほしい、出来るだけ長くこの幸せを感じていたい。しかし彼に触れられている熱は明らかに現実そのもので私は声を漏らした。

「…嘘」

現実だと思った途端、瞳からジワジワと涙が溢れて頬を伝っていく。

「嘘…嘘よ」

「何で嘘にしたがるんだよ。オメも俺のこと好きなんだろ？」

「そ、そうだけど」

「それじゃ両思いだ」

涙は止まることを知らずに先程以上に溢れてきて私の制服まで濡らしていく。

「ブツサイクな顔」

彼は笑いながらも私の濡れている頬を拭いてくれた。女の子に平気で不細工だなんて酷過ぎるなんて思ったが泣きすぎて声が出てこない。

いつまでも泣いている私に彼は苦笑いをして自分の胸を貸してくれた。

…知ってたか？お前あの時以外に一回俺と話したことがあるんだぜ。

まあお前は覚えていないかもしれないけど、だいたい一年くらい前に知らずに落とした定期券を拾ったのがお前でさ、あの時からずっとお前が乗る電車調べてずっとお前を見ていた。

そんなこと言ったらストーカーだと思われてしまっけど…人を好きになっただけじゃないからそんなことくらいしか出来なくてさ…友達に相談したらお前の事隅々まで調べてくれて…その時は参ったよ。

私が泣きやむと駅の近くのベンチでお互いのことを話していた。私と彼は少しだけ似ていて共感出来る事もあり私は彼に近づいた気がした。

「あ、そうだ」

随分話し込んで時計を見ると午後の三時。そういえば買い物をしてはと思いついた時、彼はハツとしたように鞆を開けて何かを探し始める。そして出てきたものに私は目を丸くせざるを得なかった。

「これって…」

鞆の中から出てきたのはバレンタインデーに私が捨てたチョコレート紙袋。どうしてこれを彼が持っているのだろうかと目をパチクリさせながら彼を見るとそれと同時に電車のアナウンスが聞こえてきた。

「…また作ってくれよな。ラズベリーチョコレート」

彼がそう言っ て私に手を差し伸べる。

「…気が向いたらね」

そう言いながらも私は密かに吉田さんからお菓子づくりを教えてもらおうと思っていたのは彼には内緒にしておこう。

心の中で笑いながらも私はゆっくりと彼の手を取った。

私たちの恋はラズベリーのようなほんのり酸っぱいものから始まったのだ。

## 恋するハッピー・ラズベリー（4）最終話（後書き）

…ありきたりですいません

バレンタインの話から卒業式の話…もう私立高校の人たちは卒業式  
迎え終わった頃ですね

文字数も半端ないですが最後まで読んでいただいております。ありがとうございます。  
ありがとうございます。あとお気に入り登録もありがとうございます！！

タイトルは引き続きノアロー様《<http://scarlett.jellybean.jp/snooze/>》からお借りしました。  
ありがとうございます！！

最後に…一人称って難しい。

## Elegy (前書き)

ジンとシエリーとちょっとだけ新一のお話 (死ネタ注意です)

## E l e g y

人気がない路地裏で一発の銃声の音。そしてそこには胸を押さえて倒れ込む男と寝転がったままの女。

女の両手には拳銃が握りしめられていた。

幸い近くには誰も通っていないかつたらしく拳銃の音が聞こえてもこちらに近寄ってくる人はいなかった。

しかしそんなことを考えている余裕もなく女は男の死体をどけると壁際まで座り込み、震える体を抱きながら目の前の死体をジッと見る。

(殺してしまった)

最初に思ったことがそれだった。

殺すつもりではなかった。ただ、護身用に持っていた拳銃がたまたま男の胸に当たっただけ。ワザと弾をずらして威嚇しようと思ったのに。と女は持っていた拳銃をまるで触ってはいけないもののように投げると壁に持たれて自分抱いている手を更に力を込めた。

そもそも何故このような事態が起こったのか。それは今から一時間前に遡る。

女は仕事終わりにある男に呼び出された。

今から指定されたところまで来い

たった一行だけの文面に女は呆れてそれを見ていた。いつもそうだ。あの男は全然連絡してくれないくせに忘れた頃に突然このような文章を送ってくる。まるで自分の存在を忘れさせないかのように。

女は脳内で男の不満を一方的にぶつけるが決してその本音を張本人には言えない。言ってしまうれば後でどんな恐ろしいことが起こりうるか知っているから。

（本当に幹部はお気楽なものね）

文面の最後に書かれていた『指定された場所』からはあまり時間がかからない。もう少しここでゆっくりして待たせてやるのか。

そんな悪戯もする気もなくなり、女は白衣をハンガーに掛けるとコートを着て研究室を後にした。

しかし『指定された場所』に着くとそこには【文章を送った】男ではなく、【見知らぬ】男がそこに立っていた。

『姉ちゃんか？俺の相手をしてくれるのは』

『え…？』

男の言っている意味が分からない。初めて会う男に女は顔を顰めて男を見ると男は気味悪い視線で女を下から上まで見て喉を鳴らした。『姉ちゃん結構美人だしスタイル良さそうだし…最高の獲物だ』

『は…？一体何言ってるの？』

とにかくこないけ好かない男は放っておいて呼び出された相手に連絡を待つ。

携帯電話を取ろうとポケットに手を入れた刹那、男が痺れを切らしたかのように女に襲い掛かってきた。

『ぎゃ…んっ…んー！…！』



叫ぼうとした口は男の手によって抑えられ足も身動きが出来ない状態。

唯一自由に動かせられた手で男を押し返そうとしたが女の力では男を押し返すことが出来なかった。

『抵抗されるほどそそのもんだ。いいねえ』

不気味な笑いと共に呟いた男の声に女は全身が凍りつく感じがした。

(このまま私はこの男に襲われてしまうのか?)

涙を一杯に溜めて女はそう思った。

一人も通りそうもないこの薄暗い路地の中で誰も助けにくれずに自分はこの男に強姦されてしまうのか。

諦めに近い感情が押し寄せてきて抵抗も弱くなったとき、女はコートの内ポケットに入っていたものに気付く。

そこに入っていたものは前に組織から護身用にと受け取った拳銃だった。

(使うのは今しかない)

女は少し戸惑ったが素早く内ポケットから拳銃を取り出して男に向かって発砲した結果、今のような状態になってしまった。

間接的には人を殺した経験はあるが、直接人を殺した経験のない女はどうすればいいのか分からなかった。

今働いている組織は基本人を殺めるところだ。こんな事態が起きても何事もなかったように去っていくだろう。

(馬鹿みたい…私は組織の人間なのに)

こんな死体なんてごろごろ見たことがある。薬の実験で死んでゆくもの、誰かに殺されたのを目の前で見たこともある。大抵があの銀髪の男によるもので人を殺した後に男は必ず女にこう言っていた。『このようになりたくなかったらお前も精々組織の下で働け』と。その時の男の目はとてつもなく殺気染みていて女は震えが止まらなかったのを覚えている。

怖い。

助けて。

自分が殺したのにまだ恐怖感が消えなくて、逃げたくても腰が思うように力が入らないため逃げられもしない。もし誰かがここを通ったとすれば自分はどうなるのだろうか。

警察に連行されて　そして組織に殺される。

どうせ殺されるのなら今死んだ方がいいのかもしれない。女はそう思って自分が先ほどまで持っていた拳銃を拾い上げて頭に突き抜けたようにした時、後ろから物音が聞こえて女は肩を震わせた。

「ようシエリー」

「…ジン？」

恐る恐る後ろを向くとそこにはシエリーという女を呼び出した男、ジンがそこに立っており、シエリーは少し安堵した自分に驚きを感じた。

ジンは男の死体を見るとクククと笑って死体を蹴る。

「胸に一発か…お前もなかなかやるな」

「…」

死体を見ても何も思わないジン。やはり組織の人間は死体慣れをしているのでそうなのだろうか。シエリーは呆然とジンを見て思った。

同じ組織の人間なのに何かが違うこの男。周りからは恐れられていて易々と近寄ろうとせず一目置かれている。シェリー自身もあまり関わりたくない相手だったがジンから連絡が入るために時々こうやって顔合わせをせざるを得なかった。

ジンは男の血を浴びたシェリーの姿を見るなり眉を顰めて力の入らない体を無理やりに起き上がらせ、車の中に放り込む。

「…っ！！」

勢いよく車の後座席に投げられたために頭を強く打ってしまったシェリーは頭を押さえた。

シェリーの服についていた男の血はまだ新しかったために座席についてしまったがジンはどうやら気にしていなかったらしい。愛車と言っていたのにそんなに大事にはしていないということなのか。

シェリーは息を吐いて自分の服に付いている血を見て少し体を震わせた。

「…今からどこに行くの？」

車で走らせて一時間。ジンとの会話はなく、痺れを切らしたかのようにシェリーはジンに話しかけた。しかしジンはそんなシェリーの声を無視して車を走らせる。

一方的に車に入れたというのにこっちの言葉には無視とは何事だ。いつもならそう思って頭にくるが今日はそんな気も起らない。それよりも先程自分がしてしまった事に未だ恐怖が漂っていた。

「私、初めて拳銃で人を殺したの」

無視されることを承知でシェリーは突如口を開く。誰でもいいから聞いて欲しかったのだ。

ジンはミラー越しにシェリーを見た。シェリーはまたあの時の光景を思い出すとまた体の震えが止まらなくなり自分を抱きしめるように腕を体に回して落ち着かせようとしている。きつと今でも怖いのだ。誰だって初めて人を殺せばこのようなことになる。多分。

ジンは何も言わずに車を止めた。

「…ジン？」

「とにかく家に入れ。血まみれで歩かれると目立つ」

目の前に建っている社宅は組織のために造られたものであり、その中の一つの部屋がジンの住んでいる部屋であった。

やはりジンの部屋は殺風景で見る限り机とタンスとベッドしか置かれていない。予想通りの部屋のデザインにシェリーは鼻で笑った。

いつもと違うジンの態度と初めて訪れたジンの部屋。シェリーはそれだけで先ほどまであった押しつぶされそうな気持ちが一掃と抜けたような気がした。

それから数年が経ち、ジンはシェリーを殺した。

「灰原！……！」

ジンが引き金を引いた瞬間、シェリーはスローモーションのように

その場に倒れていくのをジンはその目でしっかりと見た。  
本当はシェリーを狙ったわけではない。シェリーが組織を裏切っ  
てから共にしていたであろう工藤新一に銃を向けたはずだった。

そう、シェリーは工藤新一を庇ったのだ。

遠くからでも分かるシェリーの腹部から流れる赤い液に打った張本  
人であるジンは一瞬頭が真っ白になった。

「灰原!! しっかりしろよ!？」

「…くど、う…くん」

呂律が回らない声ではっきりと工藤新一の名を呼ぶシェリーにジンは殺気を覚える。

何故? 何故あいつの名を呼ぶ。

勢い余って再び発砲した弾はシェリーの肩に貫通し、シェリーは呻  
き声を上げる。工藤新一は思いきりジンを睨んだ。

「ジンっ… てめえ!!!」

殺気が漂っていたように見えた工藤新一の手にはジンと同じ拳銃。  
それをジンに向けて発砲した。

それから何時間が経ったのだろう。正直ジンは意識が朦朧としてい  
たせいでどうやってシェリーを担いで車を走らせたかさ覚えてい

なかった。

分かっていたのはもうシエリーは死んでいることと自分ももうすぐ死ぬこと。

ジンは工藤新一に打たれた右肩を押さえて裏路地に車を止めた。

「…情けねえ姿だな…シエリー」

車を降りて後座席にいたシエリーを引きずり下ろすと、最後の力を振り絞るようにシエリーを壁にもたれるように座らせた。

もう屍になっていたシエリーはジンの声に答えるはずもなくジンにもたれ掛るように眠っている。

ジンはシエリーを愛していた。

表情には出さなかったが、シエリーを見るだけでジンの心は満たされたような気がしたのだ。

しかしシエリーは自分とは世界が違う。まだ直接に人殺しもしたことがない未成年の娘に自分を分かってくれるはずがない。

そう思っただけでジンの行動はシエリーに人を殺させることだった。

そう、数年前にシエリーを襲った男は組織の人間だったのだ。

もう使い物にならないと『あの方』が言っていたので良い材料になると考えたジンはあの男を『女をくれてやる』と一言添えて路地裏で待たせた。

あの男は女好きで有名だからきつと奴は何時間でもあの場所で待っていることだろう。もうすぐその女に殺されることも知らずに。

その結果、事はジンの計画通りに進んでシェリーは男を殺した。その時のシェリーの表情は忘れられない。あの悲痛染みた顔はジンにとって最高の瞬間と化したのだ。

これでシェリーは俺のものになる。そう確信もした。

しかし簡単にシェリーは思い通りにならずに数年後、薬を無断使用したことや宮野明美を殺した組織に不満を感じてシェリーは逃げ出した。

愛する人が逃げた　いわゆる裏切られた憎しみでジンの心は黒い闇に覆われ、シェリーに対して殺意の感情が生まれた。

シェリーに関しては誰にも邪魔はさせない。必ず自分がこの手での女の心臓を狙ってやる。

ジンはそんな決意だけで今まで必死になってシェリーを探していた。

杯戸シティホテルでシェリーに再会したときはどんなに嬉しかったことか。

これでやっと彼女を殺せる。彼女は自分のものになる。

そんな歪んだ愛情がジンの中から沸々と溢れだして笑いが止まらなかつた。

そんなことを思い出しながらもジンは鼻で笑い、シェリーを見る。彼女はそんなジンの気持ちも知らないように安らかに眠っていた。

瀕死状態なジンだったが心は満たされていた。

今までこの瞬間を何度待ち望んでいただろう。

もう誰にも邪魔されずにシェリーを自分の手の中に収められる。

最高潮の幸福にジンはシェリーを抱き寄せると笑いながら頭に拳銃を突きつけた。

雪が降る中、二人の死体が発見されたのはそれから数時間後のことだった。



## E l e g y (後書き)

数か月前に書いたもの。

正直出来栄えはうーんって感じですよ。

文章力があああ。

でもせつかく出来たから載せよう!!!

こんな最終回は嫌だシリーズ(笑)

歩（前書き）

大学生のコロナと歩美の話（「哀前提」）

## 歩

講義終了のベルが鳴ると颯爽と出て行った教師を見て歩美は大きく背筋を伸ばした。

もう次の講義もなく、あとは真っ直ぐ家に帰るだけ。しかしこんな晴天の中このまま帰るのも勿体ないような気がして歩美は携帯電話を開くと一通のメールが来ていることに気付いた。

メールの送り主は大学の同じ学部である友達。『暇、大学近くの喫茶店にいるから来て！』なんて一方的な文章を送りつけた友達に歩美は苦笑い。三十分前にメールが来たから『もう帰っている？』とメールを送るとすぐに返事が来た。

『まだいるよ。これでコーヒー五杯目』

(五杯目って)

講義が終わり、人が少なくなっていた教室の中で盛大に吹き出しそうになり口に手を当てて笑いを抑える。

三十分で五杯コーヒーを飲んでしまう客に店員はさぞかし目を点にさせているだろう。もしかしたら店員だけでなく周りに座っている客も感心するのではないか。

そんな友達と話せば自分も目立ちそうで一瞬だけ躊躇したがメールを送ってしまった以上行かなくては相手が友達でも失礼だろう。

歩美は『今から行く』とメールと送ると机の上に散らばっていた教科書やノートを鞆の中に入れて教室を出た。

喫茶店のドアを開けるとやはり客足は少なく、中には休憩中のOLと老人夫婦と友達の四人だけ。

「歩美」

恐らく六杯目だろうコーヒーを片手に友達は歩美が来るなり手を振って居場所を伝える。歩美も軽く手を上げ早足で友達が座っている座席に向かった。

「ごめんね？急に呼び出して」

「大丈夫、今さっき講義終わったところだから」

友達の向かい側に座って掛けていた鞆を置くと店員が水を歩美に差し出す。

「えーと、クリームソーダ お願いします」

「あ、私チーズケーキセット」

『セット』ということはまたコーヒーを飲む気なのか。驚きまじりに友達を見るとペロツと舌を出して誤魔化している。本当にどれほどコーヒーが好きなのか。

店員もそう思っていたらしく、苦笑いを浮かべると「かしこまりました」と軽く頭を下げて厨房へ向かった。

「それでどうしたの？珠里ちゃんが呼び出すなんて珍しい」

「そう？まあ最近バイトばかりで歩美と全然遊んでなかったからなあ」

「そうだよ。いつも私が誘うたびに『ごめん、バイト』の二言だもん」

「ごめんごめん…夏になるとバイトの量も減るからさ。夏休みとか海に行こうよ」

コーヒーの口直しのように友達は水を飲み干す。

歩美も水を一口飲むと「そうだね」と言って笑った。

そういえば大学入って初めて海に行くことになるのかと歩美は思った。去年は色々と忙しくて夏の行事なんてやっている暇はなかったため今年こそ大いに楽しむぞと歩美は心の中で意気込んでいた。

（まずは水着を買ってこなくちゃ）

歩美は鞆の中から財布を取り出して中身を見ると所持金は五千円。

これだけのお金では水着一枚さえ買えない。思ったよりも少ない金額に歩美は項垂れた。

（やっぱり私もバイトした方がいいのかなあ？）

大学に入ってバイトし始めた人も増え始めて、逆にバイトをしていない歩美を不思議そうな顔で見た人も少なくはない。

『もしかして今頃お小遣いなんかもらってないよね？』

目の前の友達にそう言われたときは胸に矢を刺されたような痛みが心の中に襲ってきたのを覚えている。

（やっぱり今時お小遣いなんて駄目だよな）

家に帰る途中、コンビニでもよって求人誌でも取っておこうと決めた時、「お待たせしました」と店員がクリームソーダ とケーキセツトを各自の前に置いた。

友達はケーキを目の前に嬉しそうにフォークを持つ。きつと隣に置いているコーヒ―は最後になるだろう、ケーキを一口食べるとコーヒ―の中に砂糖を一杯入れてスプーンでクルクルかき混ぜながら友達は外を見た。歩美はクリームソーダ に乗っかっているアイスに集中していた。

しかし何だか様子がおかしい。

急に外の様子がざわめきだし、店員も外の様子を見に行くように店を出て行った。

他の客も会計を済ませて外に出て、今店内にいるのは歩美と友達の二人だけ。

外の様子が少し気になったが今は溶ける前にアイスを一口味わいたい。歩美はクリームソーダ の上に乗っかっているアイスを溶ける前に半分食べて、残りの半分はメロンソーダ と混ぜながら食べるのが幼い頃から好きだった。

付属されていたスプーンでアイスを掬うとパクリと一口。口の中で広がる冷たくて甘い味に歩美は少しだけ幸せを感じた時、友達が机を指で叩いて歩美を呼んだ。

「ねえ、うちの大学にパトカー止まってるんだけど」

大学の異常な事態に歩美は急いでクリームソーダ を食べると会計をして店を出た。

案の定、大学の周りは数台のパトカーが止められており、校門の前には何度も見たことがある『KEEP OUT』と書かれている黄色いテープ。そしてその周りには大勢のじゃじゃ馬。

「どうしたんだろ？何か事件でもあったのかな？」

『事件』の言葉で歩美の眉がピクリと動いた。

小学生、中学生の頃はもう嫌になるほどこのような光景を目の当たりにしたことがあったが高校になって皆と離れてから事件に遭遇したことがなかった。

(もしかしたらいるかもしれない)

事件といえば絶対に現れるのが彼でもある。歩美は目の前の人ごみをかき分けて大学に近づいた。

「え、歩美!？」

友達も歩美の後に続くように人ごみを避けて歩く。

そして歩美の手が黄色いテープに触れた瞬間、懐かしい面影にやっぱりと目を張った。

あの特徴的な髪型に黒縁眼鏡。背は高くなっているが遠くから見ても分かるほど変わらない顔立ち。

「コナン君!!!」

歩美が叫んだと同時に大学の中にいた青年は肩を震わして歩美の方を見た。

最初は叫んだ人が歩美だと気付かず、首を横に傾けたが、コナンが校門に近づくとつれ、やっと歩美の存在に気付いたらしく、「おお！」と言って歩美の傍に寄った。

「久しぶりじゃねえか、どうしたんだ？こんなところで」

ポケットに手をつ突っ込みながら爽やかな笑顔をみせるコナンに後ろに付いていた友達が「カッコいい」なんて呟いていた。

やはり世間一般でもカッコいいのか。歩美がコナンを好きになった理由は絶体絶命の危機に勇敢に助けくれたあの姿がカッコ良かったからだったので一般人のコナンに対する評価を知らなかった。

まあその話は置いと、歩美は少し頬を膨らまして手を組んだ。

「こんなところって…ここは私が通っている大学なの。もう、コナン君にこの大学に入るって前言ったじゃない」

「ああ…そう言えばこんな大学名だったよな……悪いな」

頭を掻きながら苦笑いするコナンに歩美は溜息を吐いた。この鈍感な性格の持ち主に何故恋をしてしまったのだろうかと後悔さえする。

（久しぶりに会ったけど…コナン君も忙しそうだからもう帰ろうかな）

今日、コナンに会って話をしただけでもとてもいい収穫だ。これ以上話すと邪魔になりかねない。

歩美は友達の手を取ってコナンに手を振ろうとした時、コナンの手が黄色いテープに触れてそれを上にあげた。

「入れよ。中に目暮警部と高木刑事もいるから」

「…え？」

コナンの言葉に歩美は目が点になった。それは友達も同様で、周りの目も気にしている。

「え、でも…」

「お前この生徒なんだろ？もしかしたら役に立つかもしれないしな。よかつたらお友達もどうぞ」

「い、良いんですか!？」

やはり友達は遠慮ということを知らないらしく、歩美の手を取って堂々と中に入っていた。先程の態度と違うではないか。

歩美は今日何度目か分からない溜息を吐いて大学の中に入った。

やはり事件内容は殺人だった。

殺された人は大学教授の増田浩二、歳は四十二歳。警察の話によると刃渡り十センチのナイフで数か所刺されていたらしい。

遺体は前に送検されて、今は倒れていた場所を人型にテープで張られているだけ。殺されている現場を何度も見ている歩美はともかく、事件現場を見たのも初めてであろう友達には死体を見るには刺激が大きすぎると思ったので少し安堵した。

日暮警部と高木刑事には「大きくなつたね」と頭を撫でられて、苦笑いをした。

コナンから聞いた話によると、高木夫人（旧姓佐藤）は今、産休をとっているらしい。ちなみに今月八か月に入ったとか。それから小学生の頃によく話していた婦警の由美は今年（丁度三か月前）に婚約したらしい。

多々の警視庁で働く人たちの情報を持っているコナンは多分まだ頻繁に警視庁へ通っているのだろう。さすが中学の頃に『平成のホームズ二世』と呼ばれたことはある。

現場を隅々まで調べるコナンを見ていると友達に肩を叩かれた。

「ねえねえ、『コナン君』とはどんな関係なの？」

目を細めて明らかに他人の恋事情に興味津々ですと顔に書かれているほど分かりやすい態度に歩美は乾いた声で笑った。

「どんなって…唯の幼馴染だよ」

「ふーん、唯のねえ…そう言いながら両想いだったりして」



友達の言葉に歩美は苦笑いしかできなかった。

コナンが歩美を妹としか見ていない。それは歩美自身が一番知っていて、そして悲しくなる。

「そうだったら…いいのにね」

そんな言葉しか返せなかった自分が少し嫌だった。

事件は意外に簡単なトリックだったらしく、二時間も経たずに事件は解決した。

犯人は教授の教え子で名は三崎香音。彼女は増田のことを誰よりも愛していたのに妻を裏切れないと言う彼に対して殺意が生まれたいしい。

増田を殺した後、彼女も後を追うように自殺するつもりだったらしく、ポケットの中には大量の薬が見つかった。

動機が『恋愛関係』だったからか、歩美は胸が締め付けられる想いに浸った。

「さすがコナン君、やっぱり小学校の頃から変わってないね」

「おいおい、それじゃ全然成長していないってことかよ」

「…そんな意味じゃなくて」

事件が解決して近くのベンチで一休みしていたコナンに近くの売店で買ったコーヒーを差し出すと「サンキュ」と缶コーヒーを開けた。

「…哀ちゃんは元気？」

校門前にいたじゃじゃ馬も姿を消して静まりかえったキャンパスの

中、歩美はポツリとコナンに問うた。

そう言えばコナン同様、哀も中学の卒業式以来会っていない。

哀は高校に進学せずに薬品会社に働いた。

やはり社会人になると、学生とは違って目が回るほど忙しくなるらしく、会う機会が無くなり、今に至る。

否、もしかしたら会う機会を作らなかつたと言った方が正しいかもしれない。

学生の自分とは違い、哀は立派な社会人。それだけで考え方が違ってしまいかもしれないと心の隅で恐れていた。馬鹿な考えをしている自分を見て哀が呆れる姿を見るのが怖かつたのだ。

しかしその考えも今になれば本当に馬鹿だつたんだなと思つてしまふ。

(もつと哀ちゃんと連絡取ればよかつた)

何年も連絡を取っていないせい、歩美は哀に連絡を取り辛くなつてしまい、本気で後悔していた。

そのことを小学生からの幼馴染たちには言っていない。

そう言えば大学に入学してからは哀だけではなく、元太や光彦にも会っていないかつたと今になつて思つた。

(そう言えば元太君は酒屋を継いで、光彦君は留学したんだっけ) たまにメールが来て『たまにはみんな揃つてどこか行きたいね』なんて言つて、心のどこかでそんなことなんてもうできないと思つて今だつてもう彼女とは会うことはないのに「元気？」だなんて上辺だけの言葉を呟いて、歩美は自己嫌悪に浸つて持っていた缶コーヒを強く握つた。

「俺さ、哀と結婚することにしたんだ」

「…え？」

空になった缶コーヒーを近くのゴミ箱に捨てて、コナンは突如歩美にそう言った。

中学のことからコナンと哀はお互い思い合っていることは知っていた。他の事には光彦曰くミスティアスな二人だったが恋愛事になると誰もが分かると言いそうな態度をお互い取っていたため、特に小学生からずっとコナンのことが好きだった歩美には直ぐに察知出来た。

しかし二人が思い合っているとんでもお互い素直ではないため自分から足を進めようとしなかった。だから今でも中学と変わらない状況だろうと思っていたのだが、まさか『結婚』までいつているとは。歩美は開いた口が閉じられない状態だった。

「…いつ?」

「え?」

「いつ結婚するの?」

吃驚した。それ以上に悲しかった。

何年も会っていないかったといっても、小学一年生から中学三年生の八年間はずっと一緒にいたではないか。

それなのに中学卒業して『はい、さようなら』ってあまりにも酷すぎる。

( って私と言える立場じゃないよね )

そんな状況を作ったのは紛れもなく自分なのだから。

空になった缶コーヒーを手のひらで遊びながら歩美は小さく笑った。

警察の事情聴取も終わり、校門の前に貼っていた黄色いテープが剥がされていく。

パトカーも次々に走り出して残ったのは目暮警部が乗っていたパトカー一台だけ。遠くから高木刑事がコナンを呼ぶ声が聞こえてきた。

「ほら、名探偵さん。お呼びかかっているよ」

「あ、ああ」

時刻は午後七時。夏のせいはまだ明るい空とは裏腹に歩美の表情は少し暗かった。

「…哀ちゃんによろしくね」

鞆の紐を強く掴んで、出来るだけコナンの顔を見ないように言った。今彼の顔を見ると泣きそうな気がしてならなかった。

多分一生会うことはないだろう、親友に心の中で「おめでとう」と呟いて自分も学校から出ようと思った刹那、後ろから腕を引っ張られて歩美は後ろに倒れた。

「…そんなこと言ったらアイツ、悲しむだろ」

「…」

「アイツはお前と会うことを一番楽しみにしていたんだ」

「…え？」

そう言つてコナンはスーツの内ポケットに手を入れてあるものを歩美に差し出した。

「これって」

二つ折りにされていたため、少し汚くなっていたが歩美の手に乗せられたものは紛れもなく結婚式の招待状だった。封筒にはしっかりと自分の名前が書かれていて歩美は目を丸くさせてコナンを見る。

「お前に招待状送ろうとしたんだけど、引っ越してしまつたみたいで住所分からなくてな。アドレスも電話番号も変えたみたいだから連絡手段が見つからなくて」

光彦たちに連絡先を訊く選択もあったけど、幼馴染の連絡先を訊くもの何か嫌でさ。

そう言つて頭を掻くコナンに歩美はポカンとした。

「いつお前に会つてもいいようにスーツの内ポケットに入れていたんだけど…汚くなつちまつたな」

「…」

「やっぱりこんな不格好なもの渡されたら嫌だよな。新しいものに

するからお前の連絡先を……歩美？」

汚くなった招待状を握りしめて俯く歩美にコナンは顔を傾けると彼女の頬から涙が伝ったのが見えてギョツと一步退いた。

「あ、歩美？」

招待状を渡したただけなのに何故彼女は泣くのだろうか。コナンは訳が分からずとにかく宥めようと歩美の肩を持つと余計涙が止まらなくなつたみたいで歩美はしゃがみ込んで招待状をより強く握りしめた。

向こうからは不思議そうな表情で目暮警部と高木刑事がこちらを見ている。傍から見れば、この光景は自分が彼女を泣かせているように見えるだろう。

どうにもならずコナンは小さく溜息を吐いた。出来れば泣かせたことを謝りたいが、何故歩美が泣いているのか理由さえ分からないとにかくコナンは歩美の目線に近づくようにしゃがみ込んで彼女が泣きやむのをただ待つ。

すると微かだが歩美の口から言葉が聞こえた。

「ありがとう」

くしゃくしゃになった招待状を自分の顔に寄せて歩美は泣きながらも笑った。

「コナン君…おめでとう」

はつきりと告げた歩美にコナンは優しく微笑んだ。

辺りはすっかり暗くなっていた。

コナンは送ると言ったが今日は何となく歩きたい気分だった。六月上旬の季節に蝉はまだ鳴いていないが半袖でも寒くはない気温に歩

美は上に羽織っていたパーカーを脱いで腰に巻く。

その時、パーカーのポケットに入っていた携帯電話が震えだしたのを歩美は気付いた。

ディスプレイを開けると二通のメール。今送られてきたメールは友達宛からだった。

『今からカラオケ行かない？もちろんオールで！』

相変わらずの友達に歩美はクスクスと笑った。そう言えば事件が解決して、コナンと話している時にはもう友達の姿は見えなかった。一体どこに行っていたのだろうか。

(でも…気晴らしにはいいかもね)

こんな日には思いきり歌って楽しみたい。歩美は『OK』と返事を打つと、もう一通のメールを見て目を見開く。

(本当はコナン君の婚約相手が哀ちゃんだと知ってホッとした。幼いことからコナン君のことが好きで、多分今もこの気持ちは変わらないと思うけど…コナン君が他の女の人のところに行くより哀ちゃんと一緒に居てくれた方が何となく安心できる。そう思っている自分分は少しだけわがままかな?)

歩美は暗くなった空を見た。電灯のせいで綺麗な星は見れないが、自分の心は先程と違って晴々していた。

「会いたいな」

ポツリとそう呟いて歩美は待ち合わせの場所へと足を運んだ。

もう一通のメールの主は幼い頃好きだった親友から。

『いつでも遊びにいらっしやい』という文書と共にもう一人の家の主と一緒に写っている写真が送られた。

## 歩（後書き）

短編では初の歩美ちゃん。

歩美ちゃんはこの先ずっとコナン君を好きでいてくれたら良いなと思っ（憧れ的な感じで）

話的には満足できていないのでもしかしたら書き直す可能性あります（汗）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6331p/>

---

短編集

2011年10月8日03時00分発行